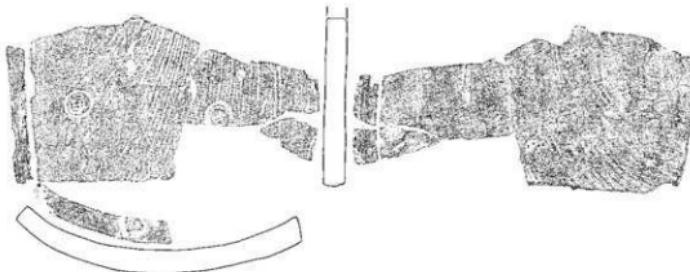


堀 遺 跡

(第9地点)

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2008

水戸市教育委員会

堀 遺 跡

(第9地点)

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

水戸市教育委員会

ごあいさつ

「堀遺跡」は、那須茶臼岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しております。

当遺跡の周辺には、5世紀前半に築造された首長墓とみられる「愛宕山古墳」、古代常陸国那賀郡の郡衙周辺寺院である「台渡里廃寺跡」など多くの史跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に宅地造成工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。

本発掘調査により、奈良・平安時代の堅穴建物跡や掘立柱建物跡などが確認されるとともに、各種の遺物が出土し、本市の古代史研究はもとより、古代集落の実態を考えいくうえでも大変貴重な資料が発見されました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚を図るとともに、学術研究等の資料として、広く御活用いただくこととなれば幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大なる御理解と御協力をいただきました事業者の矢崎様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました茨城県教育庁文化課、水戸市史跡等整備検討専門委員の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成20年9月

水戸市教育委員会
教育長 鯨岡 武

例　　言

1. 本書は宅地造成工事に伴い、有限会社日考研茨城により行われた発掘調査報告書である。
2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

堀(ほり)遺跡（第9地点）

水戸市渡里町字高野台3309、3314、3315、3316-1、3316-3、3317-1番地に所在する。

3. (有)日考研茨城が矢崎重和からの委託を受けて、茨城県教育委員会および水戸市教育委員会の指導のもとに発掘調査を下記の期間に実施した。

4. 発掘調査組織は下記のとおりである。

　　鯨岡　武　　水戸市教育委員会教育長

事務局　小澤　邦夫　　水戸市教育委員会教育次長

　　仲田　立　　水戸市教育委員会文化振興課長

　　中里　誠志郎　　水戸市教育委員会文化振興課長補佐

　　宮崎　賢司　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係長

　　川口　武彦　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事

　　関口　慶久　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事

　　緑川　義規　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係主事

　　新垣　清貴　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

　　渥美　賢吾　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

　　木本　挙周　　水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

　　調査担当者　大沢　淳志　　日本考古学協会員 (有)日考研茨城調査研究室長

　　調査員　遠藤　啓子　　(有)日考研茨城調査研究員

整理作業は、水戸市教育委員会の指導のもとに、小川和博(日本考古学協会員 (有)日考研茨城代表取締役)・大沢淳志・遠藤啓子・大沢由希紀子・大久保敦子・中野富美子・大野美佳(以上(有)日考研茨城)が行った。

5. 本書の編集は、小川和博・大沢淳志が行った。

6. 本書の執筆は、小川和博・大沢淳志・遠藤啓子のほか、渥美賢吾・川口武彦・木本挙周があたった。文責はそれぞれ文末に記載した。

7. 本書で使用した図面の方位は全て座標北である。

8. 本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖(農林水産技術会議事務局監修2000年版)に従った。

9. 遺構および遺物の写真撮影は大沢淳志・小川和博が行った。

10. 記録および出土遺物は、水戸市教育委員会が保管している。

11. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第です(敬称略・順不同)。

【個人】 青山俊明、飯島一生、岡本東三、川崎純徳、川尻秋生、木本好信、黒澤彰哉、

後藤一成、後藤道雄、高島英之、長谷川聰、三井猛、森郁夫、山路直充、

山中敏史、横倉要次、吉村武彦

【機関】 茨城県教育庁文化課、文化庁文化財部記念物課、明治大学古代学研究所

12. 調査には以下の者が参加した。

小野豊、友部政夫、佐賀実、谷中昌、相田三郎、佐藤實、塩澤和紀、下山豊二、藤岡勤、大谷和枝、小沢明子、島崎清子、芦沢千枝子、浜敏子、皆川典子

13. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

掘立柱建物跡:SB 竪穴建物跡:SI 溝跡:SD 土坑:SK 円形有段遺構:SX 搅乱:K

本文目次

あいさつ

例言

本文目次

挿図目次

図版目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過

- | | | | |
|-----|---------|-------|---|
| 1-1 | 調査に至る経緯 | 川口 | 1 |
| 1-2 | 発掘作業の経過 | 大渕・遠藤 | 2 |
| 1-3 | 整理作業の経過 | 大渕・遠藤 | 3 |

第2章 遺跡の周辺環境

- | | | | |
|-----|--------------|-------|---|
| 2-1 | 地理的環境 | 川口 | 4 |
| 2-2 | 歴史的環境 | 川口・渥美 | 4 |
| 2-3 | 堀遺跡における既往の調査 | 川口 | 9 |

第3章 検出された遺構と遺物

- | | | | |
|-----|---------|----------------|----|
| 3-1 | 奈良・平安時代 | 小川・大渕・川口・木本・遠藤 | 11 |
|-----|---------|----------------|----|

第4章 総括

- | | | | |
|-----|---------------------|-------|----|
| 4-1 | 土地利用の変遷 | 大渕・小川 | 39 |
| 4-2 | SI01・SX01出土の文字瓦について | 木本・川口 | 40 |

引用・参考文献 43

挿図目次

第1図	堀遺跡の範囲と第9地点の位置	1
第2図	堀遺跡第9地点の試掘調査トレッジ配置と遺構検出状況	2
第3図	堀遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第4図	遺構配置図	11
第5図	掘立柱建物跡SB01実測図	12
第6図	掘立柱建物跡SB01出土遺物	13
第7図	掘立柱建物跡SB02実測図	13
第8図	掘立柱建物跡SB02出土遺物	13
第9図	掘立柱建物跡SB03実測図	14
第10図	掘立柱建物跡SB03出土遺物	15
第11図	掘立柱建物跡SB04(P1)、土坑SK05・13実測図	16
第12図	槽列SA01実測図及び出土遺物	17
第13図	竪穴建物跡SI01実測図	18
第14図	竪穴建物跡SI01カマド実測図	19
第15図	竪穴建物跡SI01出土遺物(1)	20
第16図	竪穴建物跡SI01出土遺物(2)	21
第17図	竪穴建物跡SI02実測図	22
第18図	竪穴建物跡SI02カマド実測図	23
第19図	竪穴建物跡SI02出土遺物	24
第20図	竪穴建物跡SI03実測図及び出土遺物	25
第21図	竪穴建物跡SI04・05・06実測図及び出土遺物	25
第22図	竪穴建物跡SI07実測図及び出土遺物	25
第23図	円形有段遺構SX01実測図	26
第24図	円形有段遺構SX01出土遺物(1)	26
第25図	円形有段遺構SX01出土遺物(2)	27
第26図	井戸跡SE01実測図	28
第27図	井戸跡SE01出土遺物	28
第28図	井戸跡SE02・03実測図及び出土遺物	29
第29図	土坑SK01・02・03・04・06・10実測図及びSK10出土遺物	30
第30図	土坑SK11・12・14・15及びSK12出土遺物	31
第31図	溝SD01・02実測図	35
第32図	第1柱穴群実測図	36
第33図	第2柱穴群実測図	37
第34図	調査区出土遺物	38
第35図	那賀郡内出土の押印文字瓦	41

図版目次

PL_1	調査区全景、調査区全景
PL_2	調査区全景、遺跡遠景
PL_3	1.1号掘立柱建物跡(SB01)全景、2.1号掘立柱建物跡(SB01)P2、 3.1号掘立柱建物跡(SB01)P4、4.2号掘立柱建物跡(SB02)P2、 5.2号掘立柱建物跡(SB02)全景
PL_4	1.3号掘立柱建物跡(SB03)全景、2.3号掘立柱建物跡(SB03)P3、 3.3号掘立柱建物跡(SB03)P5、4.3号掘立柱建物跡(SB03)P6、 5.3号掘立柱建物跡(SB03)P7
PL_5	1号竪穴建物跡(SI01)、1号竪穴建物跡(SI01)カマド、

- 1号竪穴建物跡(SI01)遺物出土状況、1号竪穴建物跡(SI01)遺物出土状況
PL.6 2号竪穴建物跡(SI02)、2号竪穴建物跡(SI02)カマド、3号竪穴建物跡(SI03),
3号竪穴建物跡(SI03)遺物出土状況
PL.7 4号・5号・6号竪穴建物跡(SI04・05・06)、7号竪穴建物跡(SI07),
1号円形有段遺構(SX01)
PL.8 1号井戸(SE01)、1号井戸(SE01)、2号・3号井戸(SE02・03)
PL.9 1号溝(SD01)、1号溝(SD01)、2号溝(SD02)
PL.10 第1柱穴群(Pit01)、第2柱穴群(Pit02)、第2柱穴群(Pit02)
PL.11 4号土坑(SK04)、6号土坑(SK06)、7号土坑(SK07)、8号・14号土坑(SK08・14)
PL.12 1 : SB01, 2 ~ 4 : SB02, 5 : SB03, 6 : SA01, 1 ~ 7 : SI01
PL.13 9 ~ 20 : SI01
PL.14 1 ~ 8 : SI02, 1 ~ 2 : SI03, 3 : SI05, 4 : SI07
PL.15 1 ~ 11 : SX01
PL.16 1 ~ 7 : SE01, 1 ~ 5 : SE02, 6 : SE03, 7 ~ 8 : SK10, 9 : SK12,
10 ~ 11 : 表採

第1章 調査に至る経緯と調査経過

1-1 調査に至る経緯

平成19年1月9日付で矢崎重和(以下、事業者)から宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」が提出された。照会地である水戸市渡里町字高野台3314番地外は、周知の埋蔵文化財包蔵地「堀遺跡」の範囲に該当していることから(第1図)、文化財保護法第93条に基づく届出を茨城県教育委員会教育長(以下、県教委教育長)あて提出する必要があること、試掘調査を実施する必要があることを回答した。

その後、試掘調査の日程を調整し、平成19年2月26日～27日の期間に実施した。開発対象地内のうち道路部分に、トレレンチを4箇所設定し(第2図)、重機を用いて関東ローム層上面を目標に掘削を行った。調査の結果、トレレンチ1及び4において堅穴建物跡2棟、時期不明の溝跡1条が確認された。

その後、事業者と道路部分の位置変更について協議を重ねたが、開発計画上、道路部分の変更は困難であるとの結論に至り、平成19年6月11日付で事業者から県教委教育長あて、「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

遺構が確認された地点は道路部分であり、道路構造令に準拠する道路であり、茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱基準に照らし合わせると、原則Ⅲの(1)道路建設(改良工事)に該当すること、宅地予定箇所の雨水浸透井及び浸透井部分、防火槽部分については切土が発生することから、平成19年6月19日付教文第225号にて、記録保存を目的とした本発掘調査が相当である旨、意見書を添えて進達した。

この届出に対し、平成23年6月21日付文第444号にて、次の4点について通知があった。

(1)道路部分、防火水槽及び雨水調整施設については、確認調査により遺構等が検出された範囲は、遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響があるので、工事着手前に発掘調査を実施すること。

(2)確認調査が未実施の範囲については、確認調査を実施し、遺構等が確認され、かつ工事により損壊するなど埋蔵文化財の保存に影響がある場合は、工事着手前に発掘調査等を実施すること。

(3)調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は、その保存等について別途協議すること。

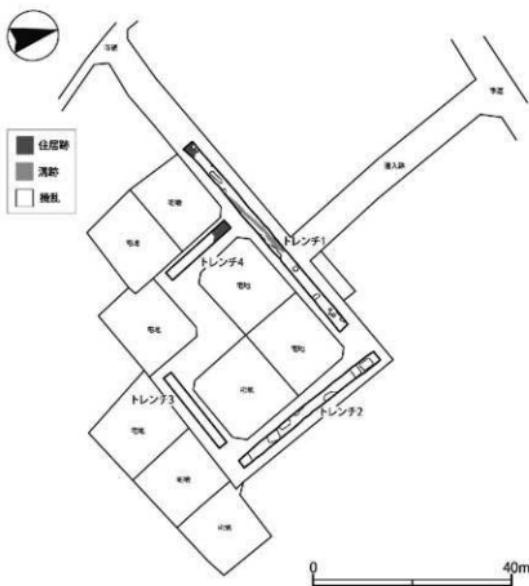
(4)宅地部分については、工事に際して慎重に行うこと。住宅建設などの新たな土木工事を行う場合には、文化財保護法に基づく届出が必要となること。さらに、第三者に譲渡等する際においても、その旨を伝達すること。

この通知を受けて、事業者は有限会社日考研茨城(以下、調査組織)と契約を締結するとともに、市教委と事業者と調査組織の間で三者協定を取り交わし、市教委の指導のもと、平成19年7月23日～9月18日の期間に記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとなった。

(川口)



第1図 堀遺跡の範囲と第9地点の位置



第2図 堀遺跡第9地点の試掘調査トレンチ配置と遺構検出状況

1-2 発掘作業の経過

堀遺跡調査第9地点の本調査は、2007年7月23日から9月8日まで、開発予定部分にあたる1,048m²を調査することとなった。なお、発掘は開発における掘削部分のみを対象としたため、検出された遺構は部分調査となったもののが多数を占めている。

まず7月23日から重機による表土除去を開始し、遺構調査を実施した。結果掘立柱建物跡4棟、竪穴建物跡7軒、円形有段造構1基、井戸跡3基、土坑15基、溝状造構2条、柱穴群2基を検出する。

2007年7月23日～9月8日

7月23日 重機による表土除去を開始する。

7月24日 重機による表土除去の完了、遺構確認のため精査を行う。溝SD01、竪穴建物跡 SI01の検出作業。

7月25日 竪穴建物跡SI01、掘立柱建物跡SB01、土坑SK01の検出作業。

7月26日 竪穴建物跡SI01・02、掘立柱建物SB01、土坑SK02・03検出作業。

7月27日 竪穴建物跡SI02・03、井戸跡SE01、円形有段造構 SX01の調査。

7月30日 竪穴建物跡SI03、円形有段造構SX01の検出作業。

7月31日 竪穴建物跡SI01・02、土坑SK01・03、掘立柱建物跡SB01、井戸跡SE01写真撮影。

8月2日 竪穴建物跡SI01・02、掘立柱建物跡SB01・02、土坑SK05検出。

8月3日 掘立柱建物跡SB01・03～06、土坑SK07～11検出。

- 8月6日 挖立柱建物跡SB01・03検出作業。全測図実測。
- 8月7日 挖立柱建物跡SB03、土坑、柱穴群実測。
- 8月8日 土坑SK04・10・12、掘立柱建物跡SB01調査。
- 8月9日 竪穴建物跡SI01・02、溝SD01、掘立柱建物跡SB01・04、土坑SK01～06写真撮影。
- 8月10日 竪穴建物跡SI03貼床除去作業。竪穴建物跡SI01・02、SD01平面図実測。
- 8月20日 挖立柱建物跡SB02・04実測作業。
- 8月21日 竪穴建物跡SI01貼床除去作業。航空撮影実施。
- 8月22日 竪穴建物跡SI01・02貼床除去作業。
- 8月24日 竪穴建物跡SI02貼床除去作業。溝SD02、土坑SK04写真撮影。
- 8月27日 円形有段遺構SX01、井戸跡SE01写真撮影。
- 8月28日 北側通路舗装除去作業を開始する。
- 8月29日 北側道路拡張。重機による表土除去。
- 8月31日 全測図実測。
- 9月3日 挖立柱建物跡SB03写真撮影。竪穴建物跡SI02・04・05、SE02・03検出作業。
- 9月4日 竪穴建物跡SI02・04～07、土坑SK15、井戸跡SE02・03写真撮影。
- 9月8日 竪穴建物跡SI04～07貼床除去・写真撮影。井戸跡SE02・03写真撮影。全測図。本日に現場作業を終了する。

(大渕・遠藤)

1-3 整理等作業の経過

当初から調査終了後の整理作業は、予算の関係で短期間に処理しなければならなかった。しかし、調査面積に対して予想をはるかに超える遺構数とその遺物量、さらに検出された遺構や出土遺物の内容の豊富さは、市内における重要遺跡のひとつとなった。したがって、報告書の刊行を含めると予算範囲内で納めるのは無理であろうと思われた。しかし、市教育委員会の担当者をはじめとする関係者の全面的な協力を得ることができ、一通りの整理作業を実施することができた。

出土品の整理については出土品である土器類と瓦類に分けて実施した。まず、須恵器・土師器および瓦等の水洗、注記、接合は早い段階で処理し、続けて土器の実測および瓦の採拓等を行う。また現場で測量した遺構等の図面の修正、トレース。さらに遺物のトレースを行う。印刷用の版下を作成する際、遺構トレースは1/30を基本に、遺構の大きさによって拡大、縮小した。また遺物トレースは報告書の出来上りにおいて土器類は1/3、1/4。瓦類は1/4になるように仕上げた。

つぎに現場で撮影した記録写真については、カラースライドは現像後スライドファイルに、白黒フィルムは現像とベタ焼き処理し、ネガアルバムにそれぞれ収納した。

報告書刊行後は出土品と記録写真、図面類すべて水戸市教育委員会へ一括返却を行い、博物館等の展示や学校教育、研究資料として活用、検索できるよう処理した。

(大渕・遠藤)

第2章 遺跡の周辺環境

2-1 地理的環境

堀遺跡は、北緯36度19分56秒、東経140度32分30秒(世界測地系)の茨城県水戸市渡里町字高野台3309外に所在する縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の複合遺跡である。調査地点は、那珂川右岸の標高32mの台地上に位置しており、低地との比高は約23mである(第3図)。遺跡は東西750m、南北630mの範囲に広がっている(第3図)。

(川口)

2-2 歴史的環境

堀遺跡が立地する那珂川下流域の台地上には先土器時代から近世に至るまでの多数の集落跡と古墳、城館跡が確認されているが(第3図、第1表)、紙数の都合により以下では本遺跡に深く関わる周辺の古墳時代～奈良・平安時代の遺跡に限定して概観する。

(1)古墳時代

堀遺跡の周辺における古墳時代の集落跡は、愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、長者山遺跡、阿川遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、富士山遺跡、小原内遺跡、坪渡里遺跡、中河内遺跡、渡里町遺跡、塙宮遺跡、白石遺跡、宮元遺跡、文京2丁目遺跡、台渡里遺跡が該当する。

これらの大半は踏査により確認された遺跡であるが、時期が判明しているのは前期の遺物が確認されている文京1丁目遺跡、中河内遺跡の2遺跡及び後期の土師器が出土している塙宮遺跡、7世紀後半の土師器や須恵器が出土している台渡里遺跡に限られる。

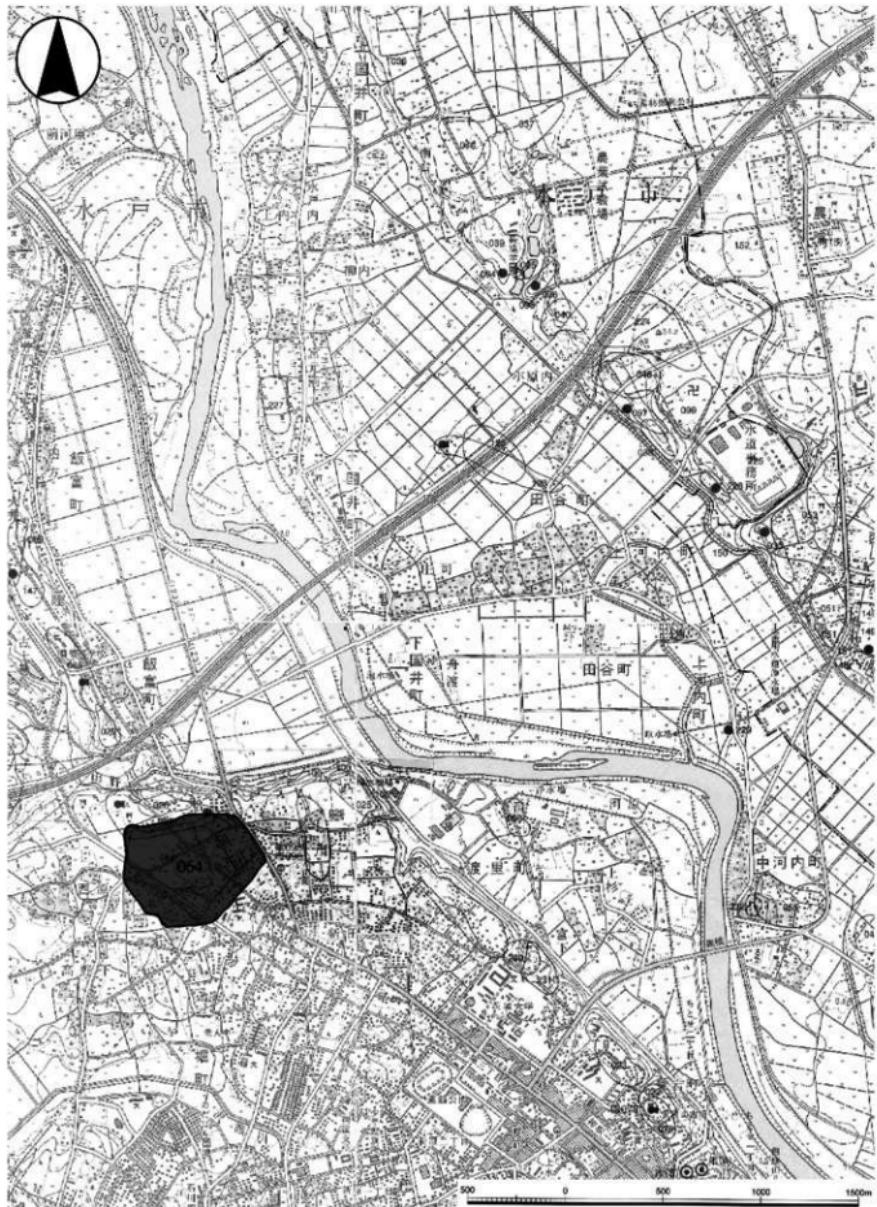
これらの集落遺跡のうち発掘調査が行われているのは、白石遺跡、塙宮遺跡、台渡里遺跡である。

白石遺跡からは、7世紀後半の竪穴建物跡が3棟確認されている(樋村 1993)。台渡里遺跡からは都市計画道路3・6・30号線の新設に伴い調査された「第二調査区」において7世紀後半の竪穴建物跡が4棟確認されている(井上・千葉 1995)。

集落の周辺に営まれている古墳は、前期～終末期のものが確認されている。前期古墳は、堀遺跡の立地する台地の北側を流れる田野川を隔てて対岸側にある台地上にかつて存在した安戸星古墳群の一部が該当する。安戸星古墳群は、前方後方墳1基と方墳1基、円墳11基から構成される古墳群で、第1号墳と第2号墳が調査されている(茂木編 1982)。第1号墳は全長28.3mの前方後方墳で、古式土師器(壺・甕・壇)とガラス玉が出土している。第2号墳は、第1号墳に先行して築造されたことが明らかとなっており、一辺が10.0m以上の方墳である。前方後方墳が含まれていることから、4世紀後葉から形成されたとみられる。

中期古墳は愛宕山古墳群の一部が該当する。愛宕山古墳群は、前方後円墳2基と円墳2基から構成される古墳群で前方後円墳2基のうち、愛宕山古墳は国の史跡に指定されており、全長約136.5m、前方部幅約75.0m、高さ約9.0m、後円部径約78.0m、高さ約10.5mの規模を持つ県内第3位の大きさの前方後円墳である。本古墳からは、黒斑を持つ円筒埴輪が多数採集されており(井・小宮山 1999)、築造年代は5世紀前葉頃に位置づけられる(井 1999、井・小宮山前掲)。

愛宕山古墳の北側にはかつて、姫塙古墳と呼ばれる全長58.0m、前方部幅20.0m、前方部高3.5m、後円部径40.0m、高さ4.0mの前方後円墳があったが、昭和48～49年の宅地造成に伴い埋没した。工事中に古墳時代前期の高坏脚部片が発見されていること、後円部に比して前方部の幅が著しく狭く、後円部よりも前方部の方が低くなる墳丘



第3図 堀遺跡の位置と周辺の道路

形態、有孔円板と鉄刀の一部が出土したと伝えられていること(大森 1964)、竪掘孔の状況から粘土郴であったと推定されていることなどから(藤村・塙谷 1982)、愛宕山古墳に近接した造営年代が推定されている(井・小宮山前掲)。また、現在は墳丘を確認できないものの、旧陸軍の歩兵第二聯隊敷地がかつてこの古墳群の付近にあり、敷地内に兵舎を建設した明治41年3月22日に孤塚古墳という円墳を破壊したらしい。この折に円筒埴輪・人物埴輪・器財埴輪が出土し、大正2年に茨城県から東京国立博物館に収蔵されている。

以上のように形象埴輪を伴う古墳もあることから、本古墳群は5世紀前葉から6世紀にかけて築造された中期～後期の古墳群である。

後期の古墳は、富士山古墳群、小原内古墳群が該当する。富士山古墳群は、前方後円墳1基と円墳8基から構成される古墳群である。第1号墳と第2号墳が水戸市史編纂事業に伴い、調査されている(大森 1964、1974b)。第1号墳は全長18.1mの前方後円墳で第2号墳は直径20.0mの円墳である。両古墳の墳丘には円筒埴輪が配されており、第2号墳からは家形埴輪と馬形埴輪の一部も出土している。第1号墳の主体部は粘土郴であった。遺物・主体部の構造から後期の古墳群とみてよかろう。小原内古墳群は、前方後円墳1基と円墳4基から構成される古墳群である。これらのうち、第2号墳は全長約16.0mの前方後円墳で、形象埴輪・円筒埴輪を伴っている。第1号墳と第3号墳は直径4.5mと18.0mの円墳である。第4号墳は湮滅てしまっているが、石棺から直刀が出土したようである。埴輪を伴うこと、石棺を持つものが含まれることから後期・終末期の古墳群とみてよかろう。

終末期の古墳は、西原古墳群、権現山横穴墓群、白石古墳群、西原古墳群が該当する。権現山横穴墓群の第1号墓及び第2号墓の玄室には、線刻壁画が認められる。第1号墓からは須恵器と土師器が出土しており、玄室の左右側壁に放射状線文が描かれている。第2号墓から遺物は出土していないが、玄室の左右側壁に稻妻形文・縦線・横線・建物・青が描かれている。第3号墓からはガラス製小玉2点、水晶製切子玉8点、第4号墓からはガラス製丸玉4点、金環2点が出土している。造営年代は7世紀前葉とする見解(大森 1974a、生田目・稻田 2002)と8世紀前後とする見解(川崎 1982)がある。

白石古墳群は5基の円墳から構成され、第2号墳の墳頂には凝灰岩片が散乱している箇所があることから、横穴式石室の存在が想定される。また、第3号墳の南側からは石棺が検出されており、いずれも埴輪を伴っていない。

西原古墳群は前方後円墳1基と円墳14基前方後円墳から構成される古墳群である。昭和26年に茨城高等史学部による発掘調査が行われており、第5号墳と第6号墳では凝灰岩の横穴式石室が確認された。第6号墳からは勾玉・管玉・丸玉・壺玉、第7号墳からは、鉄鏃・鉄片・人骨などが出土している(大森 1952a、1952b)。主体部に横穴式石室が採用されているものがあり、埴輪を伴わない点から7世紀代に位置付けられる可能性を考えていた。ところが、平成17年度に水戸市教育委員会が実施した個人住宅建設に伴う発掘調査の際に、墳丘が削平された第6号墳の周溝が検出され、内部から円筒埴輪片が多数出土した。そのことから、少なくとも6世紀代から形成されていたことが判明した。第1号墳は盟主墳と考えられるもので、全長約50.0m、後円部径30.0m、高さ3.5m前後、前方部幅15.0mの規模を持つ前方後円墳である。また、第11号も直径30.0mを超えるもので注目される。埴輪を伴う古墳があること、主体部に横穴式石室や石棺が採用されているものがあることから、後期～終末期にかけて形成された古墳群とみてよかろう。

(川口・渥美)

(2)奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡はアラヤ遺跡、長者山遺跡、西原遺跡、阿川遺跡、軍民坂遺跡、小原内遺跡、坪渡里遺跡、台渡里廐寺跡、中河内遺跡、田谷廐寺跡、渡里町遺跡、砂川遺跡、白石遺跡、上河内大塚古墳、文京2丁目遺跡、台渡里遺跡が該当する。これらのうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、台渡里廐寺跡、渡里町遺跡、砂川遺跡、白石遺跡、台渡里遺跡である。

第1表 堀遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	安宮町道跡	集落跡	縄文土器(早~後)・石斧・石錐・土偶・房生土器(後)・土師器(古)・須恵器(古)	
23	文治1丁目道跡	集落跡	縄文土器(早~後)・石斧・石錐・土偶・房生土器(後)・土師器(古前)・須恵器	
24	アラヤ遺跡	集落跡	夫婦鏡(元)・調文土器(早~後)・石斧・石錐・土偶・土師器(古・前・半)・須恵器(古・半)	S27年、H11年、H18年度調査
25	云者山道跡	集落跡	縄文土器(早~後)・房生土器(後)・土師器(古・前・半)	
26	西原道跡	集落跡	縄文土器(早~後)・房生土器(後)・土師器(古・前・半)	
27	阿川道跡	集落跡	縄文土器(古~後)・土師器(古)・土師器(古・前・半)	
28	児川道跡	集落跡	縄文土器(古~後)・房生土器(後)・土師器(古・前・後)	
29	梅岡山道跡	集落跡	縄文土器(前)・房生土器(後)・土師器(古前・後)	
40	平塚道跡	集落跡	縄文土器(中~後)・房生土器(後)・土師器(古)・須恵器	
46	軍民坂道跡	集落跡	縄文土器(元)・調文土器(前)・房生土器(後)・土師器(古)・須恵器(古・半)・須恵器(古・半)	
47	富士山道跡	集落跡	房生土器(後)・土師器(古)・須恵器	
48	小原内道跡	集落跡	縄文土器(中~後)・房生土器(後)・土師器(古)・土師器(古・前・半)	
63	石渡里道跡	集落跡	土師器(古・前・半)・須恵器(古・前・半)	
64	堀道跡	集落跡	房生土器(後)・土師器(古前)・須恵器(古)・土師器(古)・須恵器(中)・須絆車・鐵石・鐵製品(鍔・刀・刀子・鉢)・瓦・内耳土器(中)・土師質土器(中)・常滑焼(中)・搖り鉢(中)・石臼・瓦實土器(古)・磁器(近)	H15年、H16年、H17年、H18年、H19年度調査
65	中河内道跡	集落跡	古墳群(前)・土師器(古・半)	
79	安宮山古墳群	古墳群	円筒埴輪・彫象埴輪・鏡(刀)・古	前方後円墳1(2)・円墳1(2)
80	西宮古墳群	古墳群	土師器(古)・円筒埴輪(古)・須恵器・勾玉・鏡玉・丸玉・電玉・銅鏡・铁鏡(古)	H17年、H18年度調査、前方後円墳1・円墳8(14)
94	梅岡山古墳群	古墳群		円墳1(2)
95	梅岡山横穴六群	横穴群	土師器(古)・須恵器(古)・水晶質切子・ガラス製小玉(古)	横穴墓(0)4?
96	富士山古墳群	古墳群	土師器(古)・円筒埴輪・人物埴輪(古)	前方後円墳1(1)・円墳8
97	小原内古墳群	古墳群	圓筒埴輪・彫象埴輪・鏡(刀)・古	前方後円墳1・円墳2(4)
98	台底廻寺跡	寺院跡／官衙跡	ナイ形石器・男女舟型有頭頭鏡・剣片(前)・縄文土器(前~後)・石器・房生土器(後)・土師器(古・半)・須恵器(古・半)・墨書き器・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・契斗瓦・面瓦・長・鋼切り瓦・文字瓦・瓦耳瓦・鉄削粗輪・金箔製品(刀・劍)・青銅製品・鐵具(刀)・別口(中)・瓦實土器(中)	S14年~S19年、S46年~S49年、H16年、H19年~H10年、H12~H18年度調査
99	山谷庵寺跡	寺院跡／官衙跡	土師器(古・半)・須恵器(古・半)・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦(古・半)	
100	長者山城跡	城跡		H18年度調査、土壌と瓶が良好な状態で遺存
121	西里町道跡	城跡	縄文土器(早~中)・土師器(古・前・半)・須恵器(古・半)・灰粗陶器(古・半)	H15年、H16年度調査
125	伊吉古道跡	集落跡	縄文土器(中~後)・房生土器(後)・土師器(古前・後)	
126	伊吉古墳群	古墳群		前方後円墳0(1)・円墳0(2)・埋滅
224	柳川道跡	集落跡	縄文土器(中~後)・土師器(古・半)・須恵器(古・半)・石製品・土製品・陶製品・木製品・軒瓦(古・半)	
225	白石道跡	城郭跡／集落跡	角鉗石斧(先)・所置(先)・矢頭器(草創)・有舌头頭鏡(草創)・石器(草創)・縄文土器(中)・房生土器(後)・土師器(古・前・半)・須恵器(草創)・内耳土器(中)・陶器(中)・磁器(中)・組器(中)	H2~3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳5
227	宮元道跡	集落跡	土師器(古前)	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器(古・半)・須恵器(古・半)	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円墳0(1)・埋滅
230	黒原神社古墳	古墳	縄文土器(後)・土師器(古)・陶器	円墳1(3)
231	文政2丁目道跡	集落跡	房生土器(後)・土師器(古・前・半)・須恵器(古・半)	
232	中河内道跡	城跡		
276	台底廻道跡	集落跡	縄文土器(晚)・土師器(古・前・半)・須恵器(古・前・半)・墨書き土器(袋)・炭化米(古・半)・軒平瓦・平瓦・鐵製刀子(古)・鐵製鏡(古)・祇石(古)・内耳土器(中)・陶器(近)・磁器(近)・鐵具(近)・銅製鏡(近)・砾石(近)	H16年、H18年、H14~H19年度調査 (井上・夢治・仁平・根本 1998)に加筆

(井上・夢治・仁平・根本 1998)に加筆

アラヤ遺跡からは、平成元年に実施された老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う発掘調査の際に、奈良時代の堅穴建物跡2棟と工房跡1軒、4間2間の掘立柱建物跡1棟、桁行5間梁行2間以上の掘立柱建物跡1棟が検出されている(井上編 1992)。

砂川遺跡からは、昭和55年に常磐自動車道敷設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の堅穴建物跡19棟、堅穴状遺構6基、溝2条、井戸1基が検出されている(渡辺 1981)。堅穴住居跡からは土師器、須恵器とともに鐵製足金具や刀子、雁又縫、鎌、土製紡錘車などが出土しており、井戸跡からは木製の曲物や櫛、高台付盤など注目される遺物が出土している。

台渡里庵寺跡の調査・研究は、高井悌三郎氏による戦前の学術調査を嚆矢とする(高井 1964)。その成果を受け昭和20年に長者山地区と觀音堂山地区、南方地区的3地区が県指定史跡に指定された。

長者山地区は、炭化米が出土すること、瓦倉が4棟確認されていることから(高井前掲、瓦吹 1991)、那賀郡衙正倉院と推定されていた(瓦吹前掲、黒澤 1998・2000)。平成18年度には、市教育委員会が行った範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と北側区画溝が確認され、都衡正倉院であることが確定的になったといえる。

觀音堂山地区については、これまで那賀郡衙政府跡や河内駅家とする見解もあったが(瓦吹前掲、外山1993)、平成14年から16年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、西側に講堂が、その北東に金堂とさらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵もしくは鐘楼と考えられる礎石建物が配置され、講堂の対極に位置するところには中門が配置される東向きの独自の伽藍配置をもつとみられ、その創建年代が7世紀後半に遡るものであることが明らかとなった(川口・小松崎・新垣編 2005、川口 2006、2007)。出土遺物には平瓦や丸瓦の凹・凸面に「吉(土)田」、「川邊」、「井野」、「阿波」、「中」、「志口」など台渡里庵寺跡の造営に関与した那賀郡内の郷名や「年足」のような個人名がヘラ書きされたもの、「川マ」や「禾」、「石上」銘の押印文字瓦、相輪の一部がヘラ書きされた瓦や「佛」という字の周りに絵が描かれた瓦、金箔製品、瓦製相輪の請花弁と捺管など東国初期寺院でも初見の例となる仏教関連遺物が確認されている。

南方地区についてはこれまで寺院と考えられてきたが(高井前掲、瓦吹前掲、黒澤前掲)、平成14年～16年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、塔跡基壇の内部より内面黒色処理の施された土師器窯の破片が出土したことから、9世紀後半に入つてから造営された法隆寺式伽藍配置を意識した寺院であることが判明した。觀音堂山地区の初期寺院が9世紀後半には火災で廃絶していることから、觀音堂山地区的伽藍の焼亡後に、南方地区に再建しようとしたと考えられる。また、瓦の出土量は建物規模に比べ少ないと、区画溝の掘削が中途で廃絶されていることから、造営を中止した可能性が高い(川口・小松崎・新垣前掲)。従つて、確認されなかった講堂は、本来存在しない可能性が高い。なお、これらの成果に基づき、平成17年に觀音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

台渡里遺跡では、平成6年に都市計画道路3・6・30号線敷設に伴い実施された発掘調査の第二調査区において竪穴建物跡4塔、溝6条、建物跡2棟が検出されている(井上・千葉 1995)。竪穴建物跡は出土している遺物から一号が9世紀第I四半期、二号が8世紀第III～IV四半期、五号が8世紀中葉頃、三号が8世紀第IV四半期に帰属すると考えられ、一号建物跡は2間3間の布堀りの倉庫跡とみられる。一号建物跡は第一号竪穴建物跡の貼床下より検出されていることから少なくとも9世紀第I四半期以前の構築と考えられる。

溝は出土遺物から一号溝が8世紀第III～IV四半期から9世紀第I四半期、二号溝が8世紀前半、三号溝が8世紀第III～IV四半期から9世紀第I四半期以降に埋没したと考えられる。中でも三号溝は溝の中に0.9～1.3mほどの堤方をもつ柱穴が2m間隔に列状に認められ、柵列もしくは柵立柱脚などの遮蔽施設としての性格が考えられる。遺物では二号溝から7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる須恵器や土師器類とともに畿内系暗文土師器や東海産とみられる須恵器甕や須恵器壺蓋などが出土しており、一号建物跡および三号溝などから近隣に公的施設の存在が予測される。

また、平成8年に集合住宅建設に伴い実施された確認調査では、三号溝の延長部分と7世紀第IV四半期の竪穴建物跡が1棟検出されている(井上・栗原 1996)。

さらに平成17年に実施された集合住宅建設に伴い実施された発掘調査では、奈良・平安時代の竪穴建物跡とともに正倉とみられる礎石建物跡1棟(総地業)とそれを区画する役割を果たしていた逆台形の区画溝1条が検出され、区画溝の覆土上層からは炭化米がまとまって出土した(小川・大潤・川口・松谷 2006)。竪穴建物跡からは「備所」と記銘された墨書土器が出土している。「備所」がどのような物品を備える施設なのかは、調査面積が限定されて判然としないが、炭化米や礎石建物跡との関連から想起するならば、租税を蓄積しておくための施設名を示すと理解する

ことができる。この調査により那賀郡衙に関わる官衙施設は台渡里遺跡の東端・南端にまで展開していることが判明した。

白石遺跡からは、平成2～3年に水戸淨水場建設に伴い実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡6棟、基壇1基、溝1条、土坑12基が検出されている(樋村 1993)。

竪穴建物跡は8世紀前半が4棟、9世紀前葉が1棟、9世紀後半～9世紀末が3棟、10世紀が3棟確認されており、土師器、須恵器、長頭瓶、鉄製刀子のほかに花文線刻の劫錆車、木製の櫛や盆、皿などが出土している。掘立柱建物跡は5間3間の側柱式掘立柱建物跡3棟、4間2間の側柱式掘立柱建物跡1棟、2間1間の側柱式掘立柱建物跡1棟、36間2間の側柱式掘立柱建物跡1棟が検出されている。掘立柱建物跡の中で注目されるのは東西2間、南北36間の第3号掘立柱建物跡であり、長さは桁行約88mにもなる。第1号溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。溝の時期から8世紀前半に構築されたと考えられている。

白石遺跡に隣接する田谷庵寺跡からは、多数の瓦とともに「口里丈部里」、「生マ口里」、「岡田」など台渡里庵寺跡の長者山地区と同様の文字瓦が多数、出土している。小字には「百壇」という基壇との関係が推測される名前が残されており、3箇所の基壇と礎石の存在が報告されている(伊東 1975)。黒澤彰哉氏は本遺跡を新置の河内駅家跡と推定されているが(黒澤前掲)、田谷庵寺跡が河内駅家跡であったとすれば、白石遺跡で確認された第3号掘立柱建物跡は駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設として理解することも可能であろう。

(川口・渥美)

2-3 堀遺跡における既往の調査

堀遺跡においてはこれまで水戸市教育委員会によって8地点で発掘調査が実施されている。以下、地点毎に調査の概要をみてゆく(第2表)。

第1地点は、平成5年に実施された建売住宅の建設に伴う発掘調査で、平安時代の竪穴建物跡6棟とともに、3間2間の側柱式掘立柱建物跡1棟、2間1間の側柱式掘立柱建物跡1棟、1間1間の側柱式掘立柱建物跡1棟、土坑9基、溝状造構2条が検出されている(伊藤 1995)。

第2地点は、平成6年に実施された住宅団地造成工事に伴う発掘調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡39棟、掘立柱建物跡5棟、井戸跡2基、溝跡2条、土坑1基が検出されている(井上・千葉・樋村 1995)。竪穴建物跡は8世紀前半が6棟、8世紀後半が15棟、9世紀前半が13棟、9世紀後半が5棟確認されており、土師器、須恵器、鉄製刀子、窯・雁又謙・釣針・釘・くるり鉢などのほかに須恵器壺Gが2点出土している。掘立柱建物跡は3間2間の側柱式掘立柱建物跡2棟、桁行3間以上、梁行3間の側柱式掘立柱建物跡1棟、桁行8間以上、梁行2間の側柱式掘立柱建物跡1棟(第五号掘立柱建物跡)が検出されている。

掘立柱建物跡のうち第五号掘立柱建物跡は長谷風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性が指摘されている(樋村 2005)。土坑からは人面墨書き土器が出土している。

第3地点は、平成17年に宅地分譲に伴い実施された確認調査で、古墳時代終末期の竪穴建物跡1棟、奈良・平安時代の竪穴建物跡5棟が検出されている。

第1地点・第2地点では古墳時代終末期の竪穴建物跡は確認されていないが、本地点は台渡里庵寺跡に近い位置であり、東へ行くにつれて古墳時代終末期の竪穴建物跡の分布が見られるようになることが明らかとなった。

第4地点は第2地点の隣接地であるが、遺物は少量出土したもの、遺構は検出されていない。第5地点・第6地点は平成18年度に個人住宅建設に伴い実施された調査である。第5地点では遺構は検出されなかったものの、第6地点では掘立柱建物跡2棟、土坑3基、ピット14基が検出されるとともに、8世紀後葉～9世紀前葉頃の須恵器が多数出土している。掘立柱建物跡のうちSB01は部分的にしか確認されていないが、四面に扇と孫扇を持つ建物であった可能性がある。

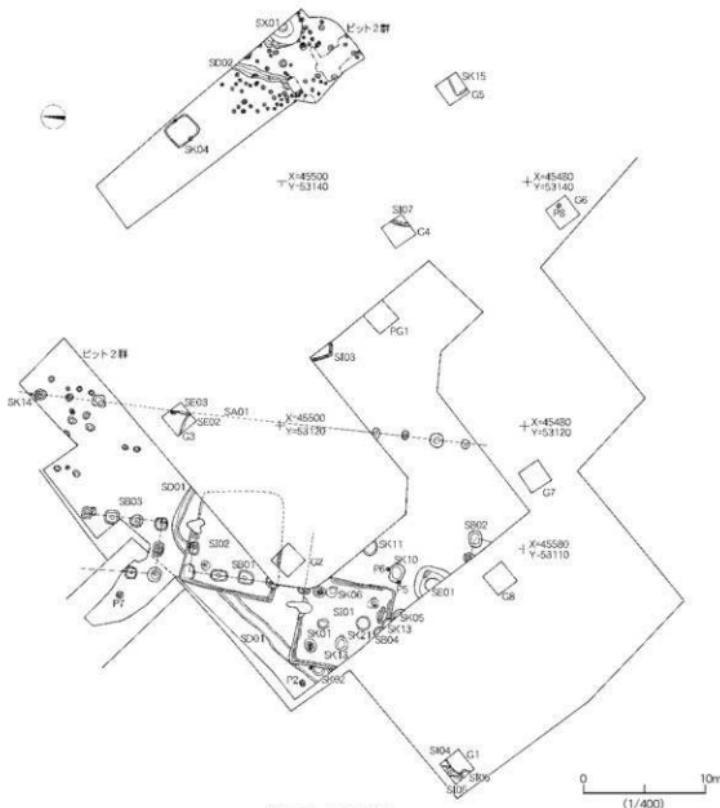
第2表 堀遺跡における既往の調査一覧

地点名	測量状況	測量箇所 (地番・道路工事等 の場合は路線名も)	測量年次	調査開始日	調査終了日	調査場所	調査原因	調査面積 (m ²)	調査担当者	遺構	遺物	文献
1		堀町字前光内828-2	5	平成5年11月15日	平成6年1月31日	本	建壳住宅建設	1,300.0	伊藤康倫	○	○	伊藤1995
2		堀町A07-601上か	6	平成6年9月2日	平成7年3月30日	本	宅地分譲	13,621.0	井上義安	○	○	井上・千葉・梶村1995
3	1	東里町字高野台3237 等地外3番地	17	平成17年5月12日	平成17年5月12日	試	宅地分譲	356.0	川口武彦・新垣清貴・ 第口慶久	○	○	水戸市埋蔵文化財 調査報告第11集
4		堀町420-8, 426-9の 一部	17	平成18年2月6日	平成18年2月6日	試	宅地分譲	540	第口慶久・新垣清貴	—	○	同上
5		堀町字馬場東381-2, 382-2番地	18	平成18年5月9日	平成18年5月9日	試	個人住宅建設	9.0	第口慶久・新垣清貴	—	○	水戸市埋蔵文化財 調査報告第22集
6	1	堀町字馬場東381-1番, 382-3番地	18	平成18年12月4日	平成18年12月4日	試	個人住宅建設	20.0	新垣清貴	—	○	同上
6	2	堀町字馬場東381-1番, 382-4番地	18	平成19年3月12日	平成19年3月20日	本	個人住宅建設	98.4	川口武彦	○	○	同上
7		堀町500-3, 500-4番地	18	平成18年10月5日	平成18年10月5日	試	宅地分譲	2.9	川口武彦	—	—	同上
8		堀町字馬場東295	20	平成21年3月23日	平成21年3月23日	試	個人住宅建設	24.5	温美智吾	—	○	整理中

第7地点は平成18年度に宅地分譲に伴い実施された試掘調査であるが、遺構・遺物ともに検出されていない。第8地点は平成20年度に個人住宅建設に伴い実施された試掘調査で遺構は検出されなかったものの、土師器・須恵器片が耕作土中より少量出土した。

以上が、既往の調査成果の概要であるが、古墳時代終末期～奈良・平安時代に土地利用が活発となり、中世・近世まで土地利用が継続してみられる遺跡であることがわかる。

(川口)



第4図 遺構配置図

第3章 検出された遺構と遺物

3-1 奈良・平安時代

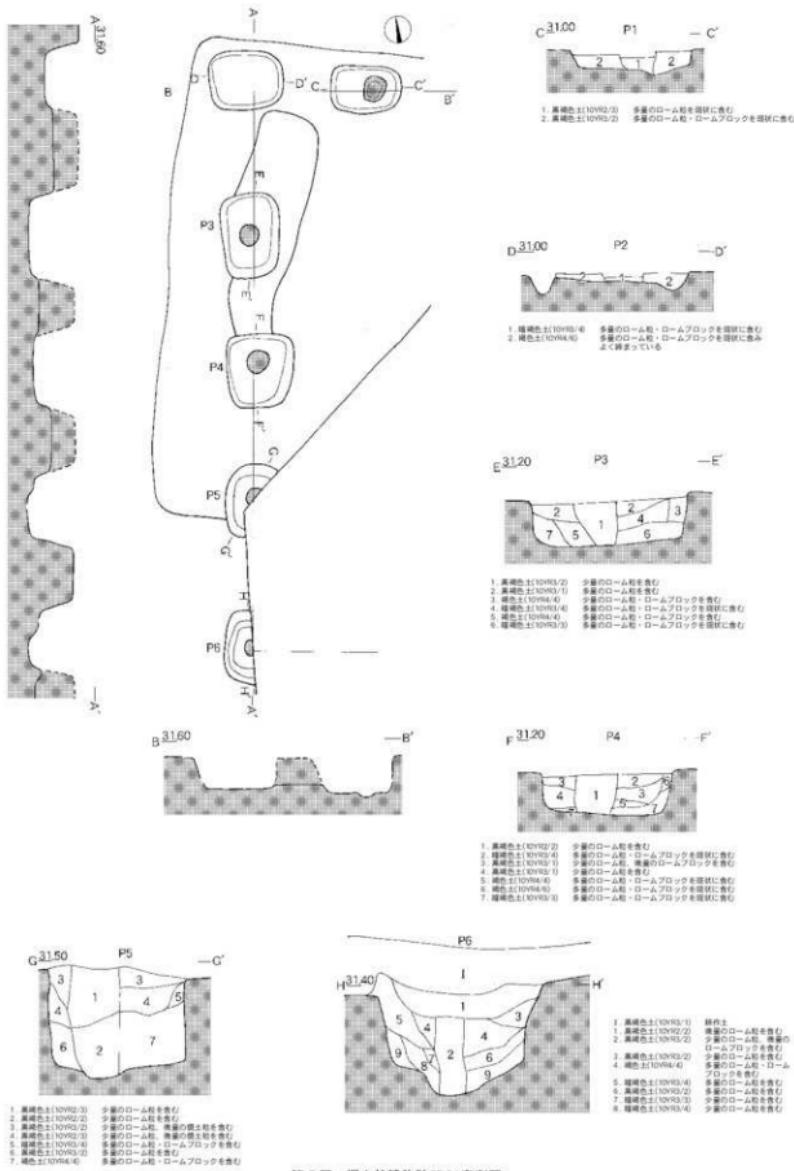
掘立柱建物跡3棟、竪穴建物跡7棟、柵列1基、円形有段造構1基、井戸跡2基、土坑6基が検出された。

掘立柱建物跡

(1) 1号掘立柱建物跡(SB01)

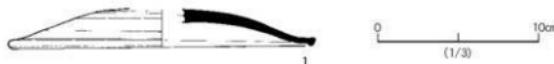
位置 本建物跡は、調査区の北側中央寄りの位置で検出されている(第5図)。2号竪穴建物跡(SI02)に重複する形で検出されている。

形式 側柱式掘立柱建物である。



第5図 挖立柱建物跡S801実測図

0
(1/40)
Im



第6図 摺立柱建物跡SB01出土遺物

規 模 桁行9.0m、梁行4.2m以上。柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺が0.8m～1.36mである(第5図・第3表)。主軸方位はN—0°～E。

構 造 桁行の柱間は不等間で、中央のP3・P4・P5の柱間が2.1m(7尺)であるのに対し、隅のP2とP3、P5とP6の柱間は2.4m(8尺)となっている。梁行の柱間は1分間しか確認できていないため、等間であったかは不明であるが、2.1m(7尺)とみられる。桁行4間、梁行2間以上(3間カ)の南北棟である。廟は伴わない。

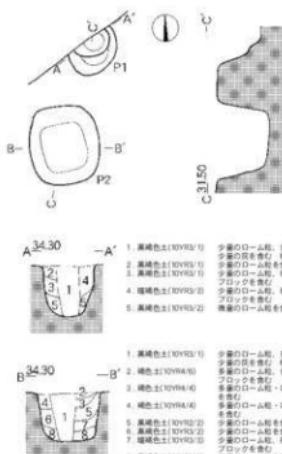
柱痕跡 大きさは直径0.22～0.36mである。P1～P6の深さの最大深度は0.16～0.94mとばらつきがあるが、P1～P4についてはSI02の覆土掘削中にその存在を確認できたため、検出深度の違いを示しているに過ぎない。

廃絶過程 いずれの柱穴にも柱抜取穴や柱切取穴が検出されていないことから、柱材の抜取りは行われてない。

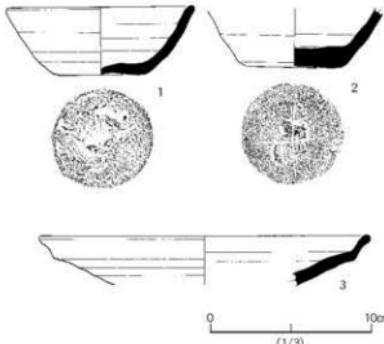
造営時期 2号竪穴建物(SI02)が埋没した後に構築されていることから、8世紀第3四半期以降とみられる。

第3表 摺立柱建物SB01柱穴一覧

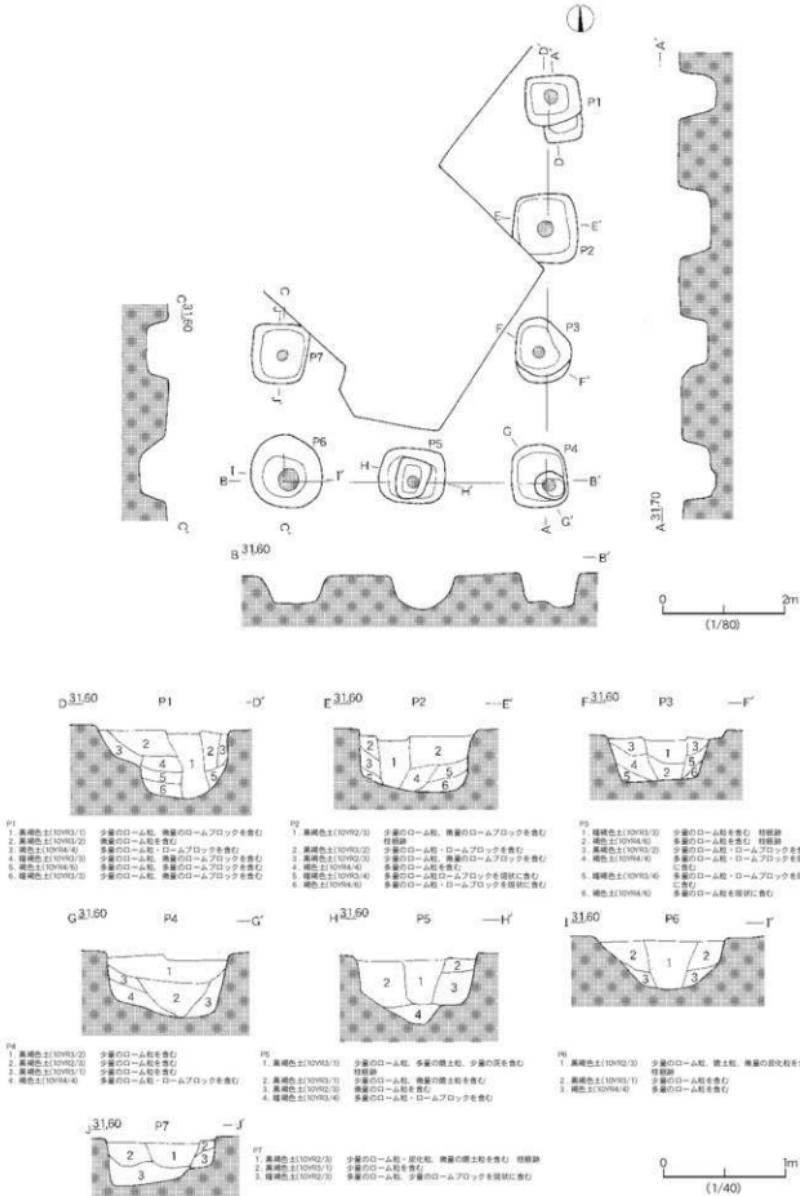
柱穴名	東西長(m)	南北長(m)	深さ(m)	柱痕跡の直徑(m)
P1	1.16	0.80	0.20	0.28
P2	1.24	1.16	0.16	0.32
P3	1.00	1.36	0.40	0.3～0.32
P4	1.08	1.20	0.36	0.32
P5	0.88	1.20	0.90	0.36
P6	—	1.24	0.94	0.22



第7図 摺立柱建物跡SB02実測図



第8図 摺立柱建物跡SB02出土遺物



第9図 掘立柱建物跡SB03実測図



第10図 挖立柱建物跡SB03出土遺物

(2) 2号掘立柱建物跡(SB02)

位置 本建物跡は、調査区の南西端で検出されている(第7図)。

形式 挖立柱建物である。

規模 本建物は、大部分が調査区外に延びているものと推定でき、掘立柱穴2基のみ検出のため、全容は不明である。柱掘形として南側P1は隅丸長方形を呈し、長軸1.75cm、短軸1.09m、深さ0.83m。北側P2は約半分が未調査区域に延びており、形状は明瞭ではないが、楕円形と推定され、検出長軸0.56m、短軸0.85m、深さ0.73mである。

構造 柱間は1.8m(6尺)等間。柱痕跡の大きさはP1が直径0.20m、P2が直径0.26mである。

廃絶過程 いずれの柱穴にも柱抜取穴や柱切取穴が検出されていないことから、柱材の抜き取りは行われてない。

造営時期 遺物として須恵器・壺2、盤1が出土しており9世紀中葉に比定されていることから9世紀第2四半期以降とみられる。

(3) 3号掘立柱建物跡(SB03)

位置 本建物跡は、調査区の最北端の位置で検出されている(第9図)。

形式 側柱式掘立柱建物である。

規模 本建物は、大部分が調査区外に延びており、全容は不明である。桁行6.3m以上、梁行4.2m。柱掘形は隅丸方形・円形を呈し、一辺が0.80m~1.20mである(第9図・第4表)。主軸方位はN~E°~E。

構造 桁行・梁行とともに柱間は2.1m(7尺)等間。廻は伴わない。柱痕跡の大きさは直径0.20~0.30mである。P1~P7の深さは0.26~0.50mであり、数10cmのばらつきがあるが、これは柱材に長さの揃った規格材でないものを利用したことから、柱穴の掘削深度に差が現れているとみられる。

廃絶過程 いずれの柱穴にも柱抜取穴や柱切取穴が検出されていないことから、柱材の抜き取りは行われてない。また、柱痕跡には炭化粒子や焼土粒子が含まれていることから、焼失した可能性がある。

造営時期 遺物として須恵器・高台付壺が出土しており9世紀前半に比定されていることから、9世紀前半以降とみられる。

(4) 4号掘立柱建物跡(SB04)

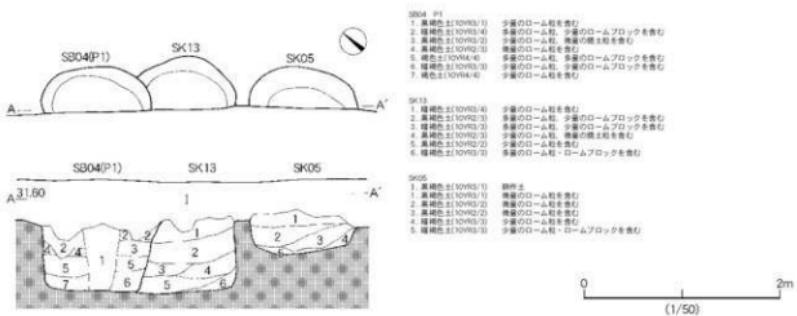
位置 本建物跡は、調査区の西側、1号竪穴建物跡(SI01)内で検出されている(第11図)。

形式 挖立柱建物である。

規模 本建物は、掘立柱穴1基のみ検出され、残りすべてが調査区外に延びており、全容は不明である。柱掘形は半分以上が未調査区域に延びており、形状は明瞭ではないが、楕円形と推定される。長軸0.89m、検出短軸0.39m、深さ0.85mである(第11図)。

第4表 挖立柱建物SB02柱穴一覧

柱穴名	東西長 (m)	南北長 (m)	深さ (m)	柱痕跡の 直径(m)
P1	0.80	0.92	0.60	0.20
P2	1.08	1.16	0.50	0.24
P3	0.92	1.08	0.38	0.2~0.32
P4	0.92	1.04	0.50	—
P5	1.08	0.96	0.40~0.50	0.22~0.3
P6	1.20	1.20	0.44	0.22~0.3
P7	0.96	1.0	0.26~0.3	0.22



第11図 挿立柱建物跡SB04(P1)、土坑SK05・13実測図

構造 柱間は不明。柱痕跡の大きさは直径0.20cmである。

廢絶過程　柱抜取穴や柱切取穴が検出されていないことから、柱材の抜き取りは行われていない。

造當時 駿穴建物跡SI01を切って構築されていることから8世紀第3四半期以降とみられる。

備列

(1) 1号機列(SAO1)

位 置 本遺跡は、調査区の東側で検出されている(第12図)。

P1	0.96	0.83	0.30	0.20
P2	0.61	0.54	0.31	—
P3	1.10	0.59	0.36	—
P4	0.98	0.67	0.46	—
P5	0.67	0.56	0.76	—
P6	1.17	1.15	0.42	—
P7	0.75	0.74	0.59	—

造営時期 SB01と主軸方向が近いこと、柱筋が並んでいるように見えることから8世紀第3四半期以降とみられる。

堅穴建物跡

(1) 1号堅穴建物跡(SI01)

位 置 本建物跡は、調査区の北西寄りの位置で検出されている(第13・14図)。1号掘立柱建物跡(SI01)・SK01・SK06・SK13・SK21に切られている。

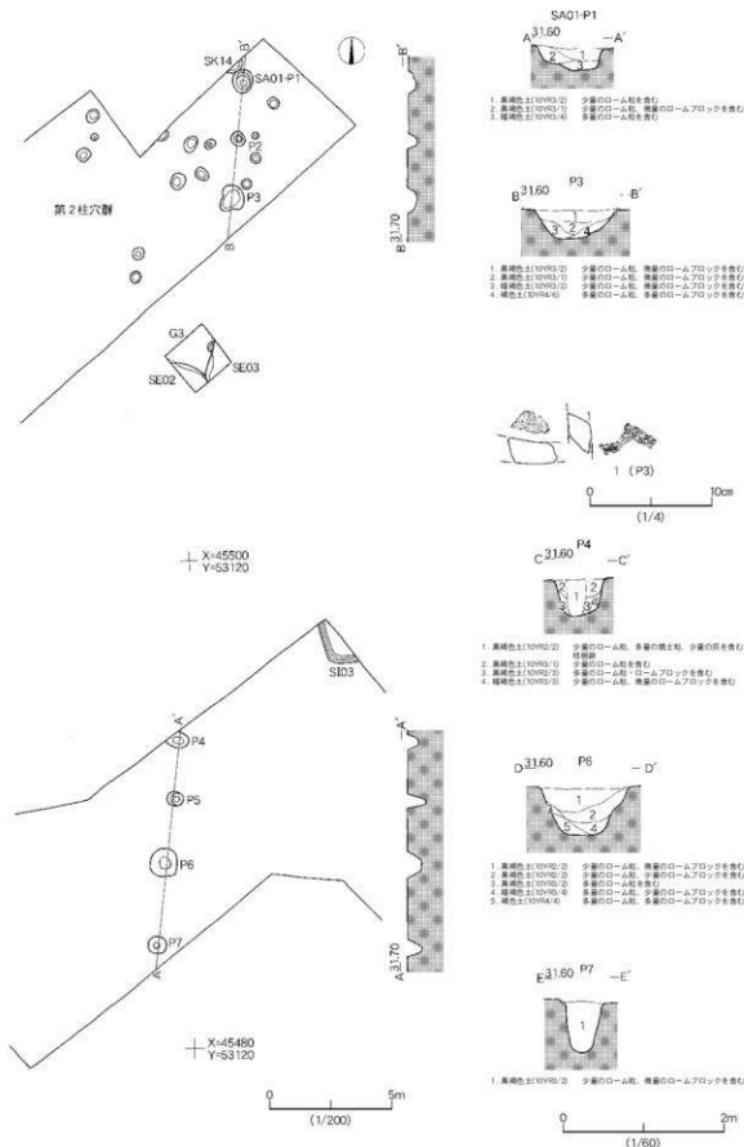
規模・構造 東西7.3m、南北7.4mである(第13・14図)。遺構確

第5表 楊列一覽

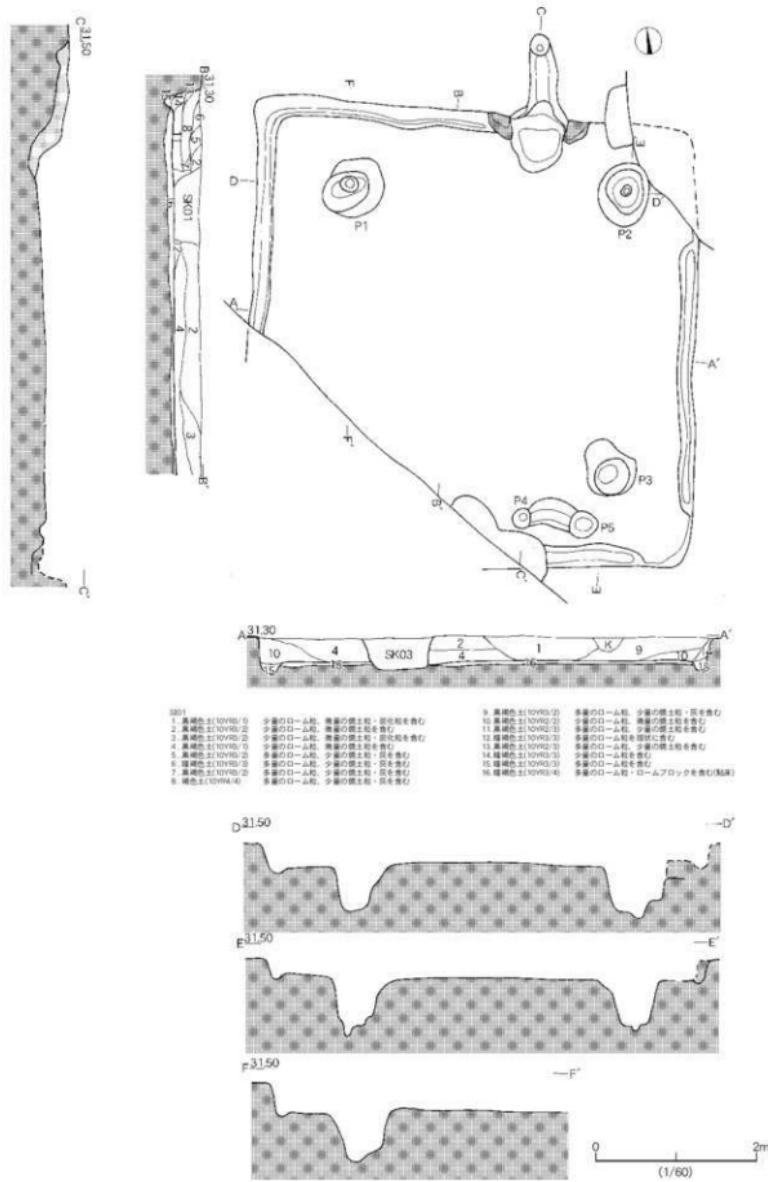
柱穴名	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱痕跡の 直径(m)
P1	0.96	0.83	0.30	0.20
P2	0.61	0.54	0.31	—
P3	1.10	0.59	0.36	—
P4	0.98	0.67	0.46	—
P5	0.67	0.56	0.76	—
P6	1.17	1.15	0.42	—
P7	0.75	0.74	0.59	—

第6表 腹穴織物S101其穴一覧

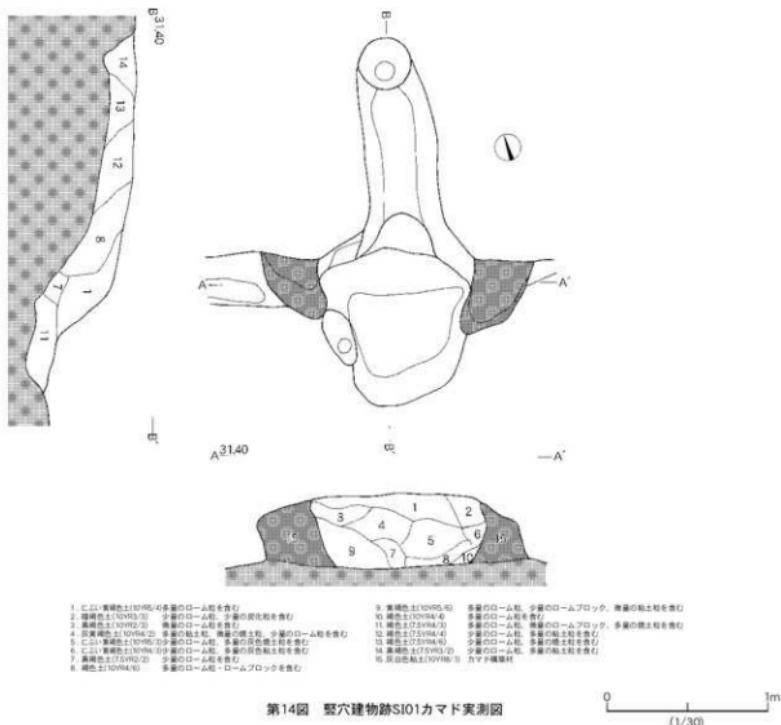
第5表 第8種類SUS柱ハーフ				
柱穴名	東西長 (m)	南北長 (m)	深さ (m)	柱痕跡の 直径(m)
P1	1.00	0.96	0.8~1.0	—
P2	0.80	1.04	0.8~0.84	—
P3	0.80	0.84	0.94	—



第12図 横列SA01実測図及び出土遺物



第13図 堪穴建物跡SI01実測図



第14図 積穴建物跡SI01カマド実測図

認面である関東ローム層から床面までの深さは0.4mで、柱穴が3基確認されている(第5表)。いずれの柱穴の深さも0.80~1.0mの間にまとまりを見せており、柱材に長さの揃った規格材を利用していたことを示しているとみられる。壁の直下には幅20~36cmの周溝が巡っている。主軸方位はN-10°-E。

出土遺物 須恵器無台杯6、須恵器有台杯1、須恵器盤1、須恵器蓋1、須恵器甕2、砥石1、鉄津2、平瓦7が出土している(第15・16図)。

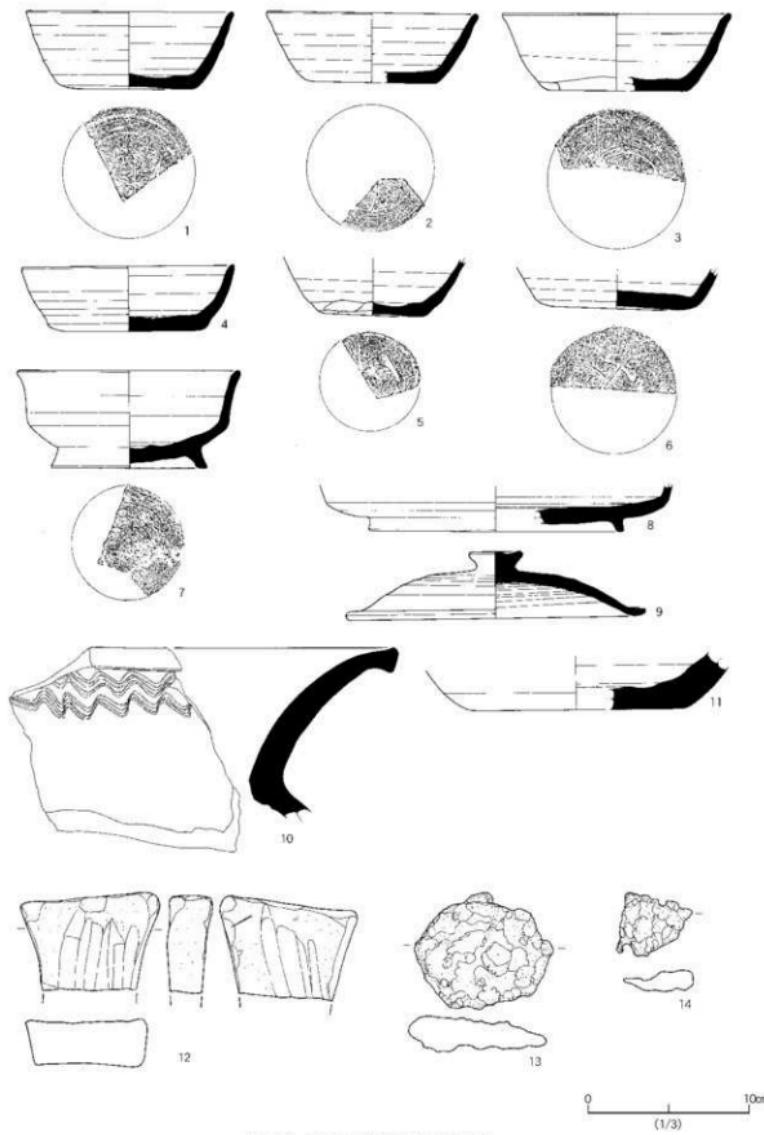
覆 土 16層に区分され、焼土粒や灰が含まれている層が多いことから、焼失した可能性もあるが、炭化材や屋根材等が倒壊した状況で確認されておらず、直近の積穴建物焼失に伴い人為的に埋め戻された可能性がある。

造営時期 出土遺物および1号掘立柱建物跡(SB01)に切られていることから8世紀後半期とみられる。

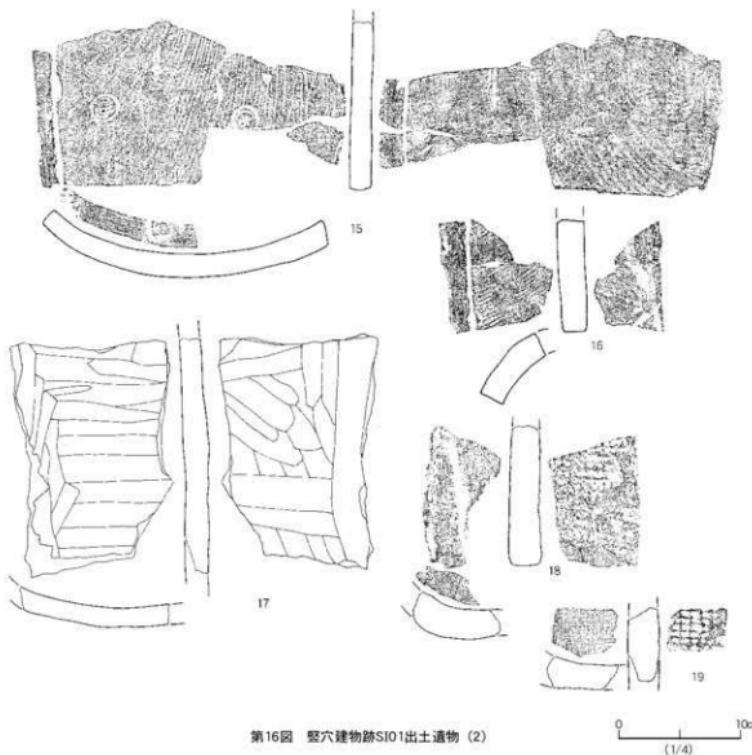
(2) 2号積穴建物跡(SI02)

位 置 本建物跡は、調査区の北西寄りの位置で検出されている(第17・18図)。1号掘立柱建物跡(SI01)・SK01・SK06・SK13・SK21に切られている。

規模・構造 東西7.0m以上(推定8.4m)、南北8.2mである(第17・18図)。遺構認面である関東ローム層から床面までの深さは0.4mで、柱穴が2基確認されている(第7表)。いずれの柱穴の深さも0.80~0.84の間にまとまりを



第15図 穂穴建物跡S101出土遺物 (1)



第16図 壁穴建物跡SJ01出土遺物（2）

0
1
10cm
(1/4)

見せており、柱材に長さの捕った規格材を利用していたことを示しているとみられる。壁の直下には幅24~36cmの周溝が巡っている。主軸方位はN=10°—E。

出土遺物 須恵器無台杯1、須恵器甕1、須恵器圓面鏡1、土師器甕2、土製支脚1、鉄滓2が出土している(第19図)。

覆 土 17層に区分され、焼土粒が含まれている層が多いことから、焼失した可能性もあるが、炭化材や屋根材等が倒壊した状況で確認されておらず、直近の壁穴建物焼失に伴い人為的に埋め戻された可能性がある。

造営時期 出土遺物および1号掘立柱建物跡(SJ01)に切られていることから8世紀後半期とみられる。

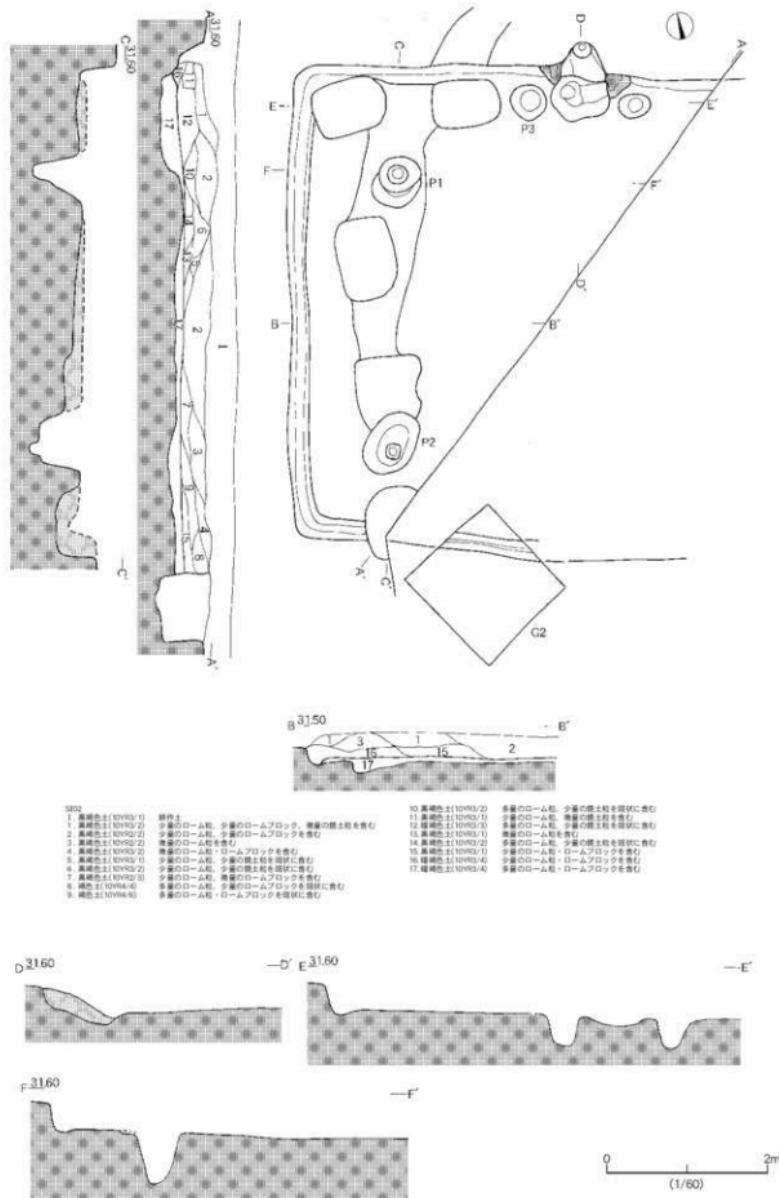
(3) 3号壁穴建物跡(SJ03)

位 置 本建物跡は、調査区のほぼ中央に位置し、北東側大半が保存区域に延びている。(第20図)

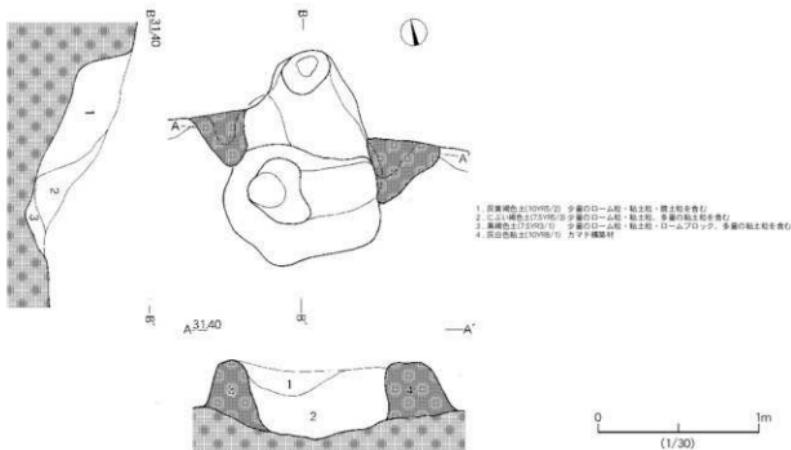
規模・構造 南西隅部のみ検出され、規模は不明。確認された南壁辺0.83m、西壁辺1.89mを測る。(第20図)。遺構確認面である関東ローム層から床面までの深さは0.30mで柱穴等の施設は確認できない。壁直下には幅29.1~

第7表 壁穴建物SJ02柱穴一覧

柱穴名	東西長(m)	南北長(m)	深さ(m)	柱痕跡の直径(m)
P1	0.80	0.84	0.8	—
P2	0.84	1.00	0.8~0.84	—



第17図 堅穴建物跡SI02実測図



第18図 穴穴建物跡SI02カマド実測図

30.8cmの周溝が巡っている。北辺を主軸とすると方位はN-20° - W。

出土遺物 須恵器瓶(湖西産)1、土師器甕(常陸型甕)1が覆土中から出土している(第20図)。

覆 土 4層に区分され、覆土に大半が多量のローム粒子を含むが、いわゆるレンズ状堆積を呈することから自然堆積土であろう。

造営時期 出土遺物から7世紀後半と推定される。

(4) 4号穴穴建物跡(SI04)

位 置 本建物跡は、調査区の西端第1グリッド(G 1)内で検出されている(第21図)。3号穴穴建物跡、5号穴穴建物跡と重複しており、5号穴穴建物跡および近現代の土坑によって切られている。

規模・構造 東壁面の一部のみ検出され、規模は不明。確認された東壁の長さ1.81m、床面の幅0.62mを測る。遺構確認面である関東ローム層から床面までの深さ0.38mで柱穴および周溝等は検出できなかった。北辺を主軸とする方位はN-37° - E。

出土遺物 図示できる遺物の出土はない。

覆 土 検出部で3層に区分され、いずれも少量のローム粒子を含み、繰りがよく、自然堆積層であろう。

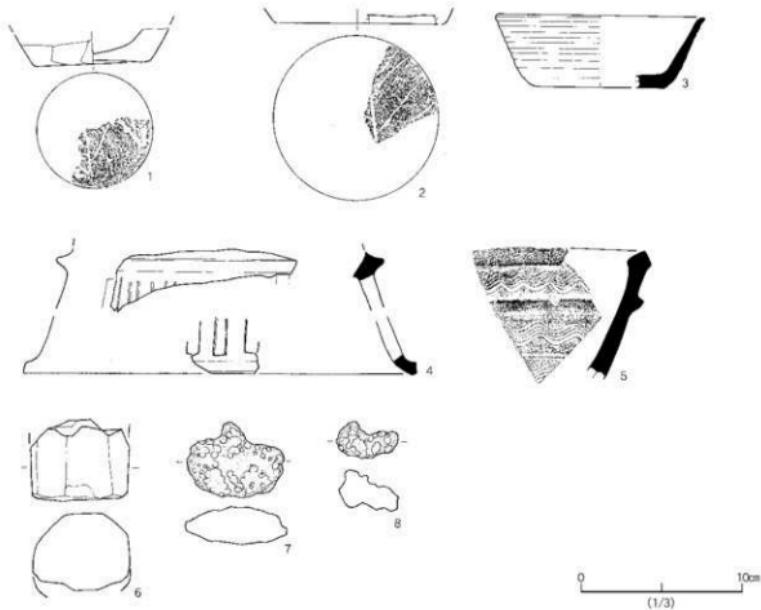
造営時期 出土遺物はないが、5号穴穴建物跡に切られていることから9世紀以前である。

(5) 5号穴穴建物跡(SI05)

位 置 本建物跡は、調査区の西端第1グリッド(G 1)内で検出されている(第21図)。4号穴穴建物跡、6号穴穴建物跡と重複し、2軒を切って構築している。

規模・構造 東壁面の一部のみ検出され、規模は不明。やや緩いカーブを描く壁面であるが、東壁面である。確認された東壁辺の長さ1.15m、床面の幅0.72mを測る。遺構確認面である関東ローム層から床面までの深さ0.475mで柱穴および周溝等の構等物は検出できなかった。北辺を主軸とする方位はN-41° - E。

出土遺物 須恵器有台杯1が覆土中から出土している(第21図)。



第19図 竪穴建物跡SI02出土遺物

覆 土 検出部で4層に区分され、いずれも少量のローム粒子を含み、締りがよい褐色土系土層であり、レンズ状を呈する自然堆積層と推定される。

造営時期 出土遺物および4・6号竪穴建物跡を切って構築されていることから10世紀前半とみられる。

(6) 6号竪穴建物跡(SI06)

位 置 本建物跡は、調査区の西端第1グリッド(G 1)内で検出されている(第21図)。4号竪穴建物跡、5号竪穴建物跡と重複しており、5号竪穴建物跡および近現代の柱穴によって切られている。

規模・構造 北東隅のみ検出され、規模は不明。確認された東壁の長さ0.63m、北壁の長さ0.63mを測る。遺構確認面である関東ローム層から床面までの深さ0.3485mで柱穴および周溝等は検出できなかった。北辺を主軸とする方位はN-06°-E。

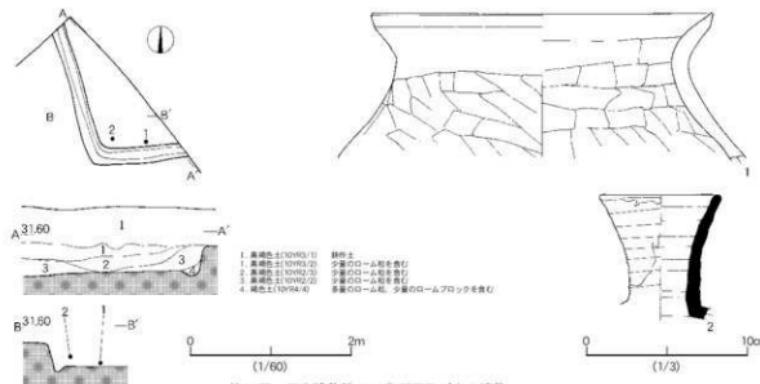
出土遺物 図示できる遺物の出土はない。

覆 土 検出部で3層に区分され、締りがあり、ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土系土層であり、人为的に埋め戻されたものと推定される。

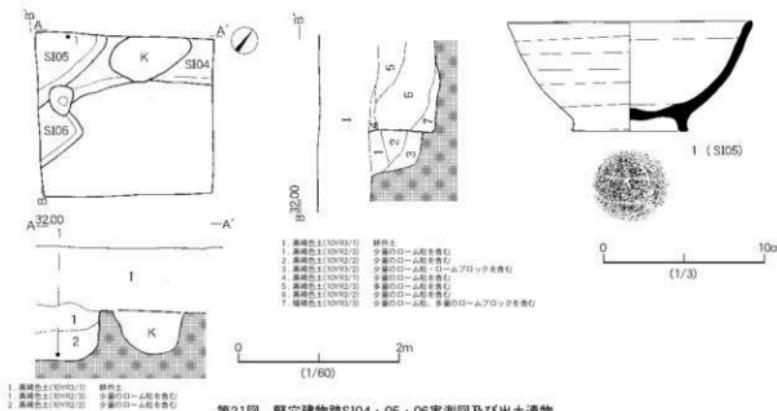
造営時期 出土遺物はないが、5号竪穴建物跡に切られていることから9世紀以前である。

(6) 7号竪穴建物跡(SI07)

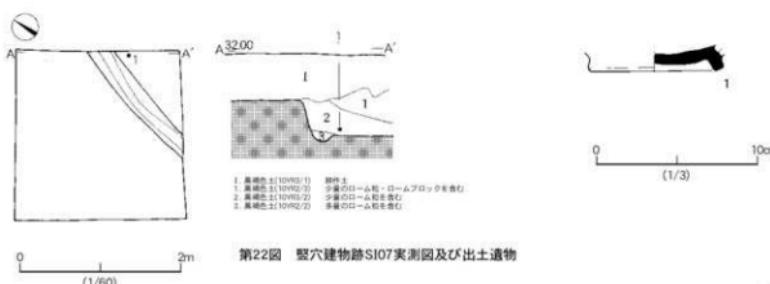
位 置 本建物跡は、調査区の東側第4グリッド(G 4)の東側で検出され、東側大半が保存区域に延びている。(第22図)



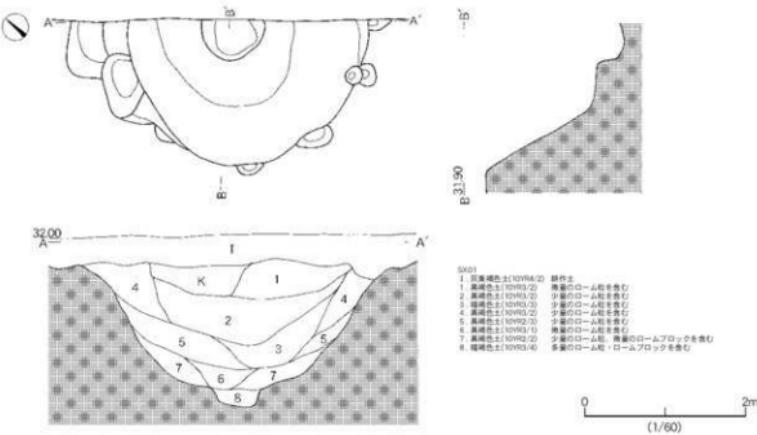
第20図 壁穴建物跡SI03実測図及び出土遺物



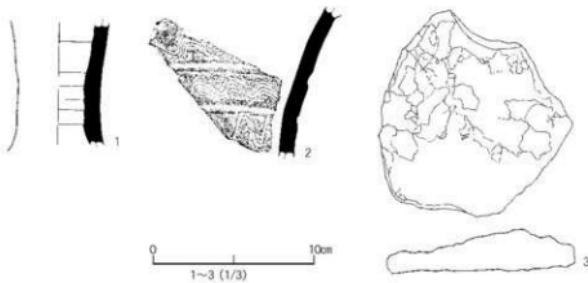
第21図 壁穴建物跡SI04・05・06実測図及び出土遺物



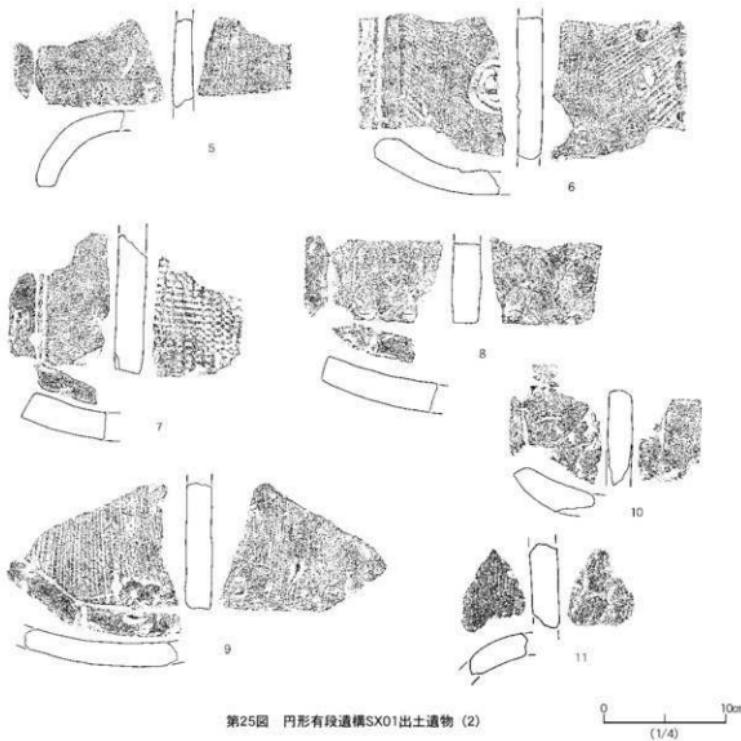
第22図 壁穴建物跡SI07実測図及び出土遺物



第23図 円形有段遺構SX01実測図



第24図 円形有段遺構SX01出土遺物 (1)



第25図 円形有段遺構SX01出土遺物(2)

規模・構造 西壁面のみ検出され、規模は不明。確認された南壁部0.83m、西壁部1.89mを測る(第22図)。遺構面である関東ローム層から床面までの深さ0.30mで柱穴は確認できない。壁直下には幅24.0~28.5cm、深さ8.30cmの周溝が巡っている。北辺を主軸とすると方位はN-20°-W。

出土遺物 須恵器瓶高台部破片1が覆土中から出土している(第22図)。

覆土 4層に区分され、覆土に大半が多量のローム粒子を含むが、いわゆるレンズ状自然堆積である。

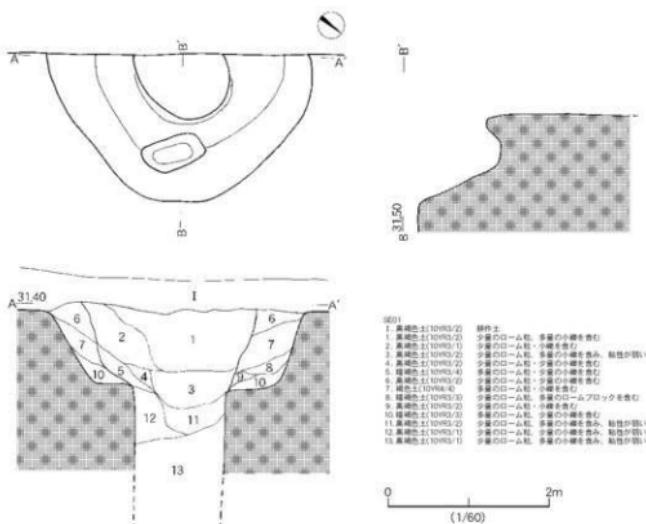
造営時期 出土遺物から9世紀代と推定される。

(川口・小川・大渕・遠藤)

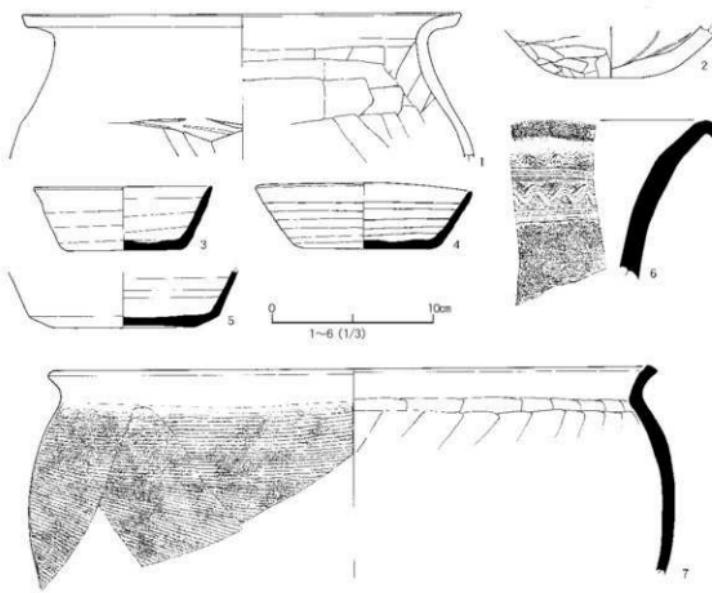
円形有段遺構

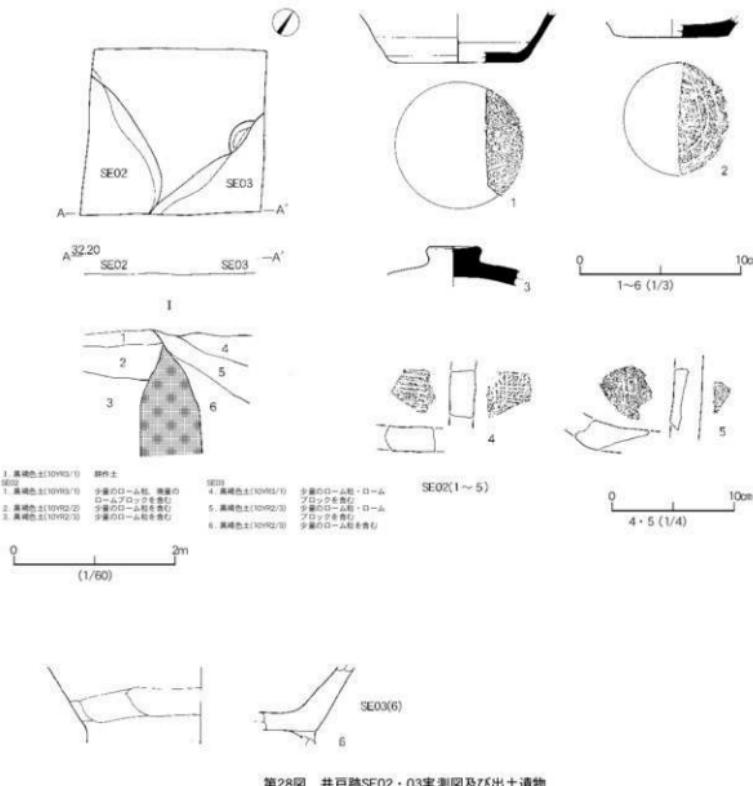
(1) 円形有段遺構(SX01)

位置 本遺構は、いわゆる水室(中山 1996・1999・2001a・2001b)と想定される円形有段遺構である。調査区の最東端の位置で検出されている(第23図)。



第26図 井戸跡SE01実測図





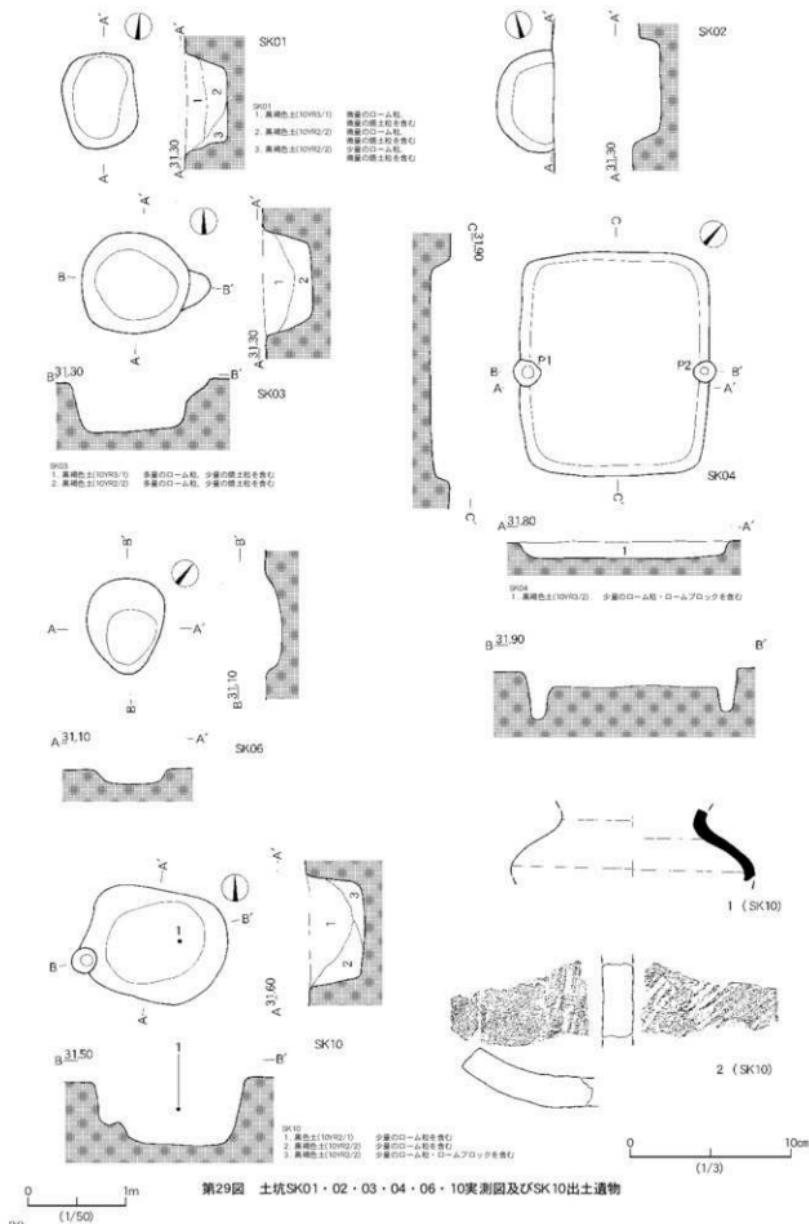
第28図 井戸跡SE02・03実測図及び出土遺物

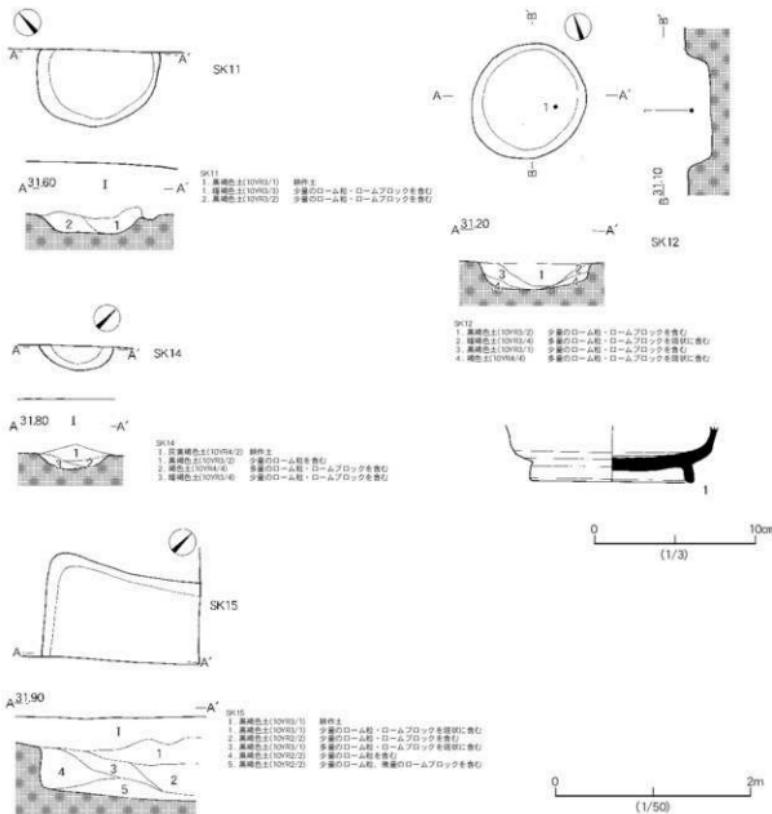
規模・構造 直径は3.5mである(第23図)。遺構確認面である関東ローム層から底面までの深さは1.6mで、底面中央に直径0.8mの円形の掘り込みがみられる。掘り込みの深さは0.2mである。また、本遺構の上場には8基のピットがみられ、付帯施設の可能性がある。

出土遺物 須恵器長颈瓶1、須恵器甕1、鉄滓1、土師器甕1、丸瓦1、平瓦5、隅切瓦1が出土している(第24・25図)。

覆土 8層に区分され、ローム粒やロームブロックが含まれている層が多いことから、人為堆積の可能性がある。

造営時期 出土遺物から8世紀第2四半期以前とみられる。





第30図 土坑SK11・12・14・15実測図及びSK12出土遺物

井戸

(1) 1号井戸(SE01)

位置 調査区の西端の位置で検出されている(第26図)。

規模・構造 直径は3.2mである(第26図)。遺構確認面である関東ローム層から中段までの深さは0.9mで、中段の央にさらに直径1.1mの掘り込みがみられる。中段からの深さは1.9m以上あるが、底面までは到達できなかった。

出土遺物 須恵器無台杯3、須恵器壺1、須恵器鉢1、土師器壺1、土師器杯1が出土している(第27図)。

覆土 13層に区分され、ローム粒や小砾が含まれている層が多い。自然堆積である。

造営時期 出土遺物から8世紀後半期以前とみられる。

(2) 2号井戸(SE02)

位置 G 3区で検出されている(第28図)。3号井戸に切られている。

規模・構造 東西1.8m以上、南北1.15m以上、深さ1.5m以上である(第28図)。調査区が狭隘であるため、底面までは到達できなかった。

出土遺物 須恵器無台壺2、須恵器壺蓋1、平瓦2が出土している(第28図)。

覆土 3層に区分され、ローム粒やロームブロックが含まれている層が多い。自然堆積である。

造営時期 出土遺物から8世紀第2四半期以前とみられる。

(3) 3号井戸(SE03)

位置 G 3区で検出されている(第28図)。2号井戸を切っている。

規模・構造 東西0.9m、南北1.9m以上、深さ1.5m以上である(第28図)。調査区が狭隘であるため、底面までは到達できなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

覆土 13層に区分され、ローム粒や小礫が含まれている層が多い。自然堆積である。

造営時期 出土遺物から中世とみられる。

土坑

(1) 1号土坑SK01(第29図)

調査区の西側、竪穴建物SI01内に位置し、SI01を切って構築している。平面形は南北に長い楕円形で、長軸0.93m、短軸0.73mを測り、主軸方位はN-3°-Wを示す。深さは43.0cm。壁面は垂直に近い急傾して立ち上がる。底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層可能である。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中世であろう。

(2) 2号土坑SK02(第29図)

調査区の西側、溝SD01内に位置し、竪穴建物跡SI01及び溝SD01に切られている。平面形は確認面で長径1.10mの円形を呈する。深さ23.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。また底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は単一層の黒褐色土で少量のローム粒を含み、織りがあり、粘性にとむ。遺物の出土はないが、8世紀前半の1号竪穴建物跡SI01に切られていることから奈良時代前半以前である。

(3) 3号土坑SK03(第29図)

調査区の西側竪穴建物跡SI01内に位置する。平面形は確認面で長軸1.29m、短軸0.99mの東西に長い楕円形。主軸方位はN-80°-Wを示す。深さ51.0cmを測り、底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は2層に分層でき、遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中世であろう。

(4) 4号土坑SK04(第29図)

調査区の北東端側に位置する。平面形は確認面で長軸2.47m、短軸2.07mを測り、南北に長い長方形を呈している。主軸方位はN-40°-Wを示す。深さ17.0cmを測り、壁面は垂直に近い急傾して立ち上がる。底面は平坦で硬化面が確認でき、長軸両壁面中央に柱穴が穿ってあり、西壁P1は27×27cm、深さ40.5cmの円形、東壁P2は24×24cm、深さ35.5cmの円形である。覆土は黒褐色土(10YR 3/2)の単一層である。遺物は出土していないが、覆土および形状から判断して中世の竪穴状遺構であろう。

(5) 5号土坑SK05(第11図)

調査区の西側に位置し、南西側約半分は保存区域に延びている。平面形は確認面で径1.08mの円形であろう。深さ23.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は

4層の分層で、レンズ状の自然堆積層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断しても中世であろう。

(6) 6号土坑SK06(第29図)

調査区の西側堅穴建物跡SI01内に位置し、平面形は確認面で長軸0.97m、短軸0.74mを測り、南北に長い楕円形で、主軸方位はN-36°-Wを示す。また検出面からの深度は最大11.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。また底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は單一層で、自然堆積層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断しても中世であろう。

(7) 10号土坑SK10(第29図)

調査区の西側に位置する。平面形は確認面で長軸1.46m、短軸1.12mの東西に長い楕円形で、主軸方位はN-78°-Wを示す。また検出面からの深度は最大68.0cmを測り、壁面は垂直に近い急傾して立ち上がる。西側壁面に25.0×25.0cm、深さ42.0cmの円形ピットが穿ってある。

覆土は3層分層でき、埋め戻し土層である。

遺物として須恵器壺、平瓦が出土しており、9世紀前半に比定されている。

(8) 11号土坑SK11(第30図)

調査区の西側に位置し、北東側が約半分保存区に延びている。平面形は確認面で径1.23mの円形であろう。検出面からの深度は最大15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。また底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は2層に分層でき、埋め戻し土層であろう。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断しても中世であろう。

(9) 12号土坑SK12(第30図)

調査区の西側堅穴建物跡SI01内に位置し、平面形は確認面で長軸1.15m、短軸1.15m、楕円形である。検出面からの深度は最大28.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。また底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は4層分層でき、上レンズ状の自然堆積層である。遺物はとして須恵器有台坪の底部破片が出土している。8世紀中葉に比定される。

(10) 13号土坑SK13(第11図)

調査区の西側に位置し、南西側約半分は保存区域に延びている。平面形は確認面で径1.06mを測り、円形であろう。検出面からの深度は最大75.0cmを測り、壁面は垂直に近い急傾して立ち上がる。また底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は6層分層でき、レンズ状の自然堆積層である。遺物は出土していないが、掘立柱建物SB04に切られ、堅穴建物SI01を切っていることから、9世紀前半に比定できる。

(11) 14号土坑SK14(第30図)

調査区の北端側に位置し、北側半分が未調査区域に延びている。平面形は確認面で径0.75mの円形であろう。検出面からの深度は最大15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。また底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層分層でき、レンズ状の自然堆積層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から判断しても古代に比定できる。

(12) 15号土坑SK15(第30図)

調査区の南東側5グリット内で検出、北西隅のみ確認された。平面形は確認面で北壁1.73m、西壁0.99m、方形を呈するものと推定される。検出面からの深度は最大42.0cmを測り、壁面は急傾して立ち上がる。また底面全体は軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は5層に分層でき、埋め戻し土層であろう。遺物として須恵器有台坪が出土しており、9世紀前半に比定されている。

溝状遺構

(1) 第1号溝状遺構SD01(第31図)

位 置 本跡は調査区の北西側で検出されている(第31図)。

規 模 北西から南西方向にかけてL字状に走る区画溝であろう。南西端と南東端はそれぞれ調査区外に延びていることから全容は不明である。残存長20.77mで、主軸方位はN-119°-Eで110°の角度で屈折する。幅0.47~1.47m、深さ0.08~0.21mの比較的浅い溝である。なお、最深部の標高は南西端で31.06m、最浅部は南東端で31.22m。その差は16.0cmであり、ほぼ地形の傾斜に沿って緩やかに下っている。

構築時期は遺物の出土がないため、詳細は不明である。豊穴建物跡SI01・02を切って構築していること、さらに掘立柱建物跡の位置関係から判断して古代以降、中世と推定される。

(2) 第2号溝状遺構SD02(第31図)

位 置 本跡は調査区東側で検出されている(第31図)。

規 模 ほぼ直線的に走る南北方向の溝である。北側は調査区外に延びており、全容は不明である。検出長4.35m、幅0.41~0.96cm、深さ0.06~0.105mの浅い溝である。主軸方位はN-13°-Eを指す。なお、底面の最深部と最浅部との比高差はわずかに2cmであり、ほぼ平坦である。

構築時期は遺物の出土がないため、詳細は不明である。しかし、周囲は中世の柱穴群が広がっていることから中世以降と推定される。

柱穴状遺構

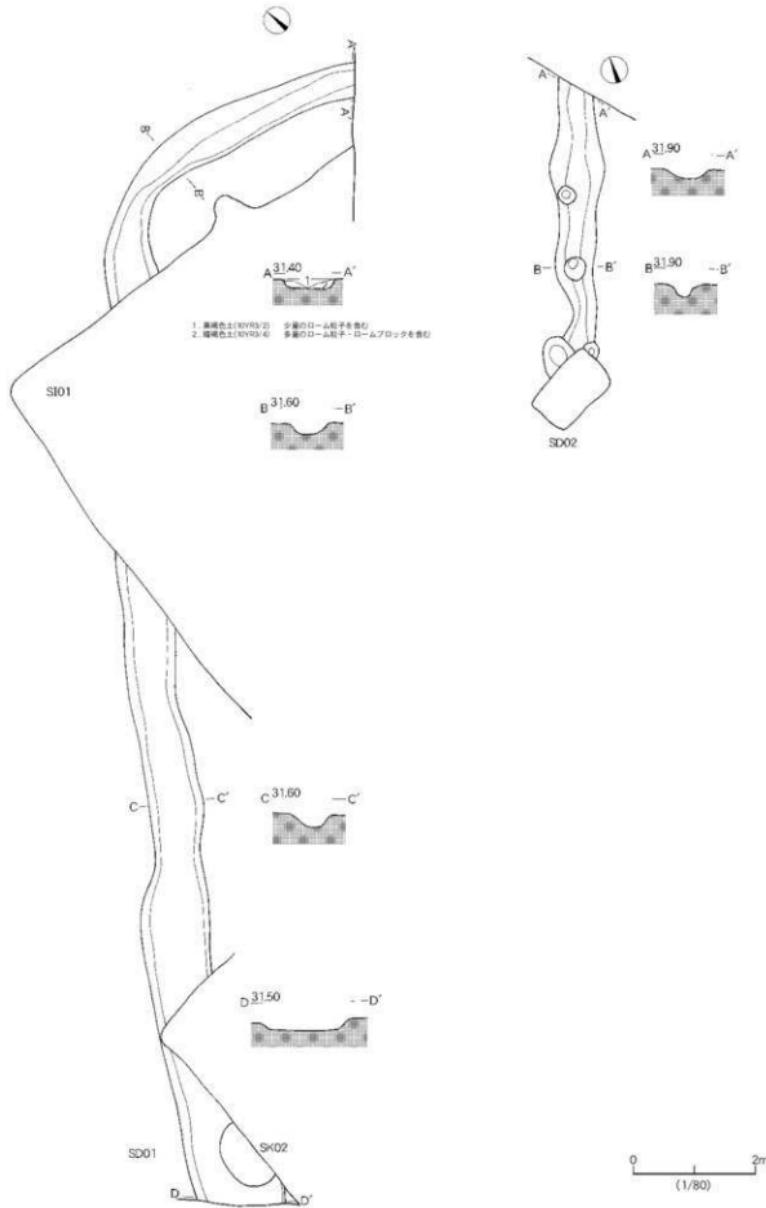
(1) 第1柱穴群(第32図)

位 置 本調査区北東側から85基のピットと呼称される柱穴状遺構が検出された。

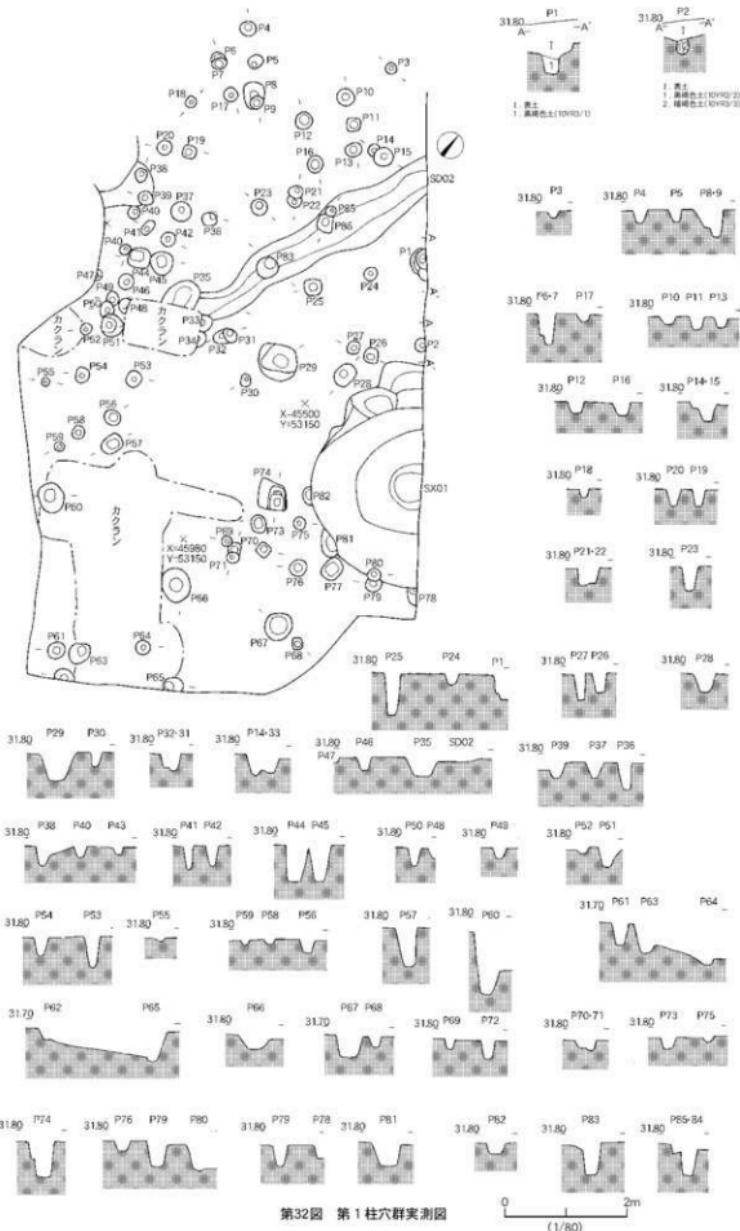
規 模 形状は円形を基調とするものの、わずかであるが楕円形・方形・隅丸方形呈しているものもみられる。規模は径14×70cm、深さ3.5~69cmと幅があるものの、平均は27cm前後に集中している。埋土は黒色土で覆われていた。遺物の出土はない。また柱痕跡の確認できるものもなく、しかも建物構造を示す配列等に規則性が認められなかった。したがって、柱穴の性格については不明である。柱穴の計測については下記のとおりである。

柱穴計測値(単位cm)

	長径×短径	深さ		長径×短径	深さ		長径×短径	深さ
P1	52×(25)	38.0	P2	22×17	26.5	P3	19×19	10.0
P4	26×25	19.5	P5	24×21	20.0	P6	25×(10)	34.0
P7	25×19	52.0	P8	46×35	29.0	P9	22×21	45.0
P10	30×27	12.5	P11	22×21	29.5	P12	28×26	18.5
P13	26×21	15.5	P14	20×(13)	10.0	P15	31×30	28.0
P16	30×24	21.0	P17	23×21	12.0	P18	18×16	14.5
P19	21×21	26.5	P20	25×23	27.0	P21	23×19	27.0
P22	23×(15)	25.0	P23	28×27	38.5	P24	22×20	17.5
P25	26×26	67.5	P26	24×22	30.0	P27	21×19	43.0
P28	38×32	29.0	P29	70×62	44.5	P30	19×16	23.5
P31	28×20	27.0	P32	24×(15)	21.0	P33	23×(17)	29.0
P34	25×(12)	35.0	P35	49×(44)	30.5	P36	22×20	43.0
P37	34×32	26.5	P38	24×19	19.0	P39	23×22	18.5
P40	22×19	18.0	P41	27×15	39.0	P42	24×23	34.5
P43	19×18	12.0	P44	37×33	52.0	P45	38×36	55.5
P46	24×24	20.0	P47	18×(11)	9.0	P48	25×(17)	17.0



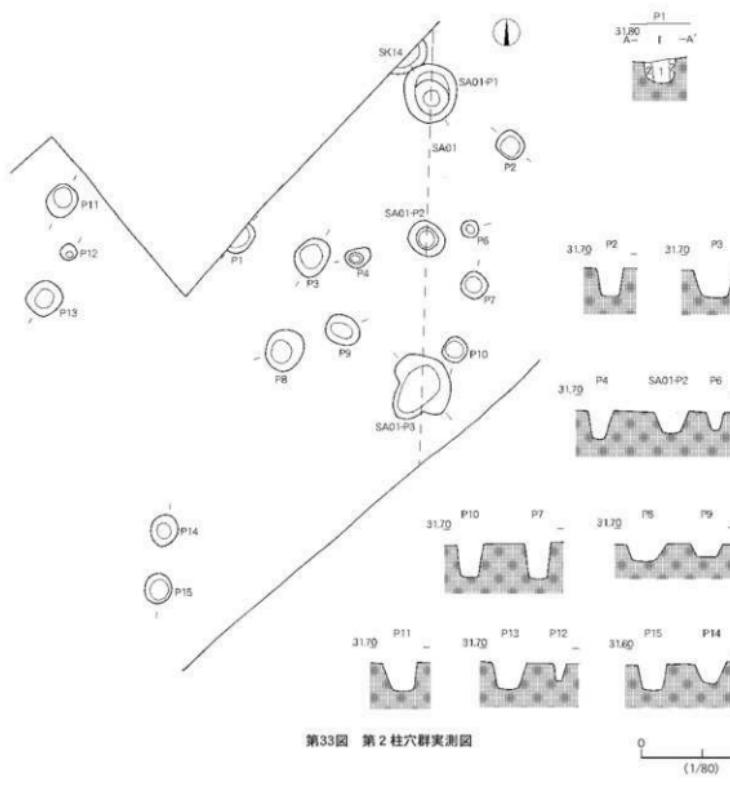
第31図 溝SD01・02実測図



第32図 第1柱穴群実測図

P49	23×21	17.0	P50	24×22	30.0	P51	37×37	31.0
P52	18×17	7.0	P53	25×25	49.5	P54	25×23	29.0
P55	14×13	3.5	P56	29×25	21.0	P57	37×28	60.0
P58	21×21	8.0	P59	17×15	6.0	P60	49×42	69.0
P61	27×27	35.5	P62	33×(19)	18.0	P63	34×30	35.0
P64	25×23	8.5	P65	32×(22)	25.5	P66	55×47	19.5
P67	47×44	34.5	P68	17×15	18.0	P69	18×17	17.0
P70	22×(18)	13.0	P71	21×17	16.0	P72	22×21	28.5
P73	28×26	18.0	P74	45×44	57.5	P75	19×18	7.0
P76	28×16	17.0	P77	37×30	33.5	P78	(28)×(16)	18.0
P79	25×24	35.0	P80	22×20	3.0	P81	49×(22)	33.0
P82	30×(16)	18.0	P83	36×34	47.5	P84	26×25	41.0
P85	17×15	7.5						

(2) 第2柱穴群(第33図)



第33図 第2柱穴群実測図

位 置 本調査区東側から14基のピットと呼称される柱穴状遺構群が検出された。

規 模 形状はいずれも円形を基調とするもので、規模は径25~70cm、深さ20.5~57cmと比較的まとまりておらず、平均は50cm前後に集中している。埋土は黒色土で覆われていた。遺物の出土はない。また柱痕跡の確認できるものもなく、しかも建物構造を示す配列等に規則性が認められなかった。したがって、柱穴の性格については不明である。柱穴の計測については下記のとおりである。

柱穴計測値(単位cm)

長径×短径	深さ	長径×短径	深さ	長径×短径	深さ
P1 57×(23)	38	P2 47×45	44.5	P3 67×52	43.5
P4 43×30	45.5	P5 29×28	28.5	P6 43×41	57
P7 70×60	26.5	P8 56×48	20.5	P9 42×39	51.5
P10 58×47	45	P11 25×25	28.5	P12 58×51	42
P13 54×45	22	P14 51×45	32.5		



第34図 調査区出土遺物

(小川・大潤・川口・木本・遠藤)

第4章 総括

前章では堀遺跡第9地点の発掘調査により確認された遺構と遺物について事実記載を行ってきた。本章ではまず、調査成果を再確認する意味も含めて、個々の時代毎に展開した土地利用の変遷を明らかにする。そして、次に竪穴建物SI01および大型竪穴状遺構SX01から出土した文字瓦について検討する。

4-1 土地利用の変遷

(1) 奈良・平安時代

今回の調査で検出された中心的な遺構は掘立柱建物跡、竪穴建物跡である。その他円形有段遺構、井戸、土坑等が検出されており、出土遺物から判断して7世紀末葉から10世紀前半にかけてもので、その集落形成が奈良時代および平安時代前半に相当する。しかも、本遺跡における集落消長の期間幅をみた場合、8世紀中ごろから9世紀中ごろを中心としており、その前後については遺構数が限定される。あたかも国家的律令制の崩壊過程にあわせた集落構成を呈している。なお、遺物の出土がない遺構もいくつかあり、切り合い関係等から遺構の時期を推定したものもある。

7世紀末葉 竪穴建物SI03が相当する。遺構としては大半が保存区域に括がっていることから、規模を含め全容を把握できていない。しかし、ここから湖西産の須恵器・平瓶の口縁部が出土している。破片とはいえ資料としては良好である。また土師器・甕の口縁部破片の出土がある。常陸型甕であり、8世紀以前に比定されており、当調査区における集落形成の端緒となる。

8世紀前葉 調査区東端で検出された円形有段遺構SX01が相当する。当遺構についてはすでに茨城県内において相当数検出されており、かつて成島一也氏が集成、その遺構についての属性規定を明記している(成島一也1996「茨城県の「大型竪穴状遺構」について」研究ノート6号 茨城県教育財団)。平面形が円形を呈し、横断面形は捕鉢状で底面に一段の掘り込みをもつ。確認面の掘り込みが2m前後、底面が1m弱、深度が2m以上等の属性である。当遺構は半分のみの検出であったが、まさにそれらの条件に符号するものである。なお、遺構については大型竪穴状遺構をはじめいくつかの名称が知られているがここでは円形有段遺構と呼称した。ここから湖西産長頸甕の口縁部破片、木葉下産大甕のほか、丸瓦、押印のある平瓦、ヘラ書きされた隅切瓦、さらには転用焼台が出土している。いずれも8世紀前半に比定され、転用焼台は径11.8×12.7cm、厚さ2.5cm、重量212.0gの不整円形を呈しているものの、良品である。なお、瓦類については流れ込みの可能性がある。

8世紀中葉 竪穴建物跡SI01が相当する。一部保存区域に掛かるため完掘されたものではないが、一辺5.5mを測る平面形は当該期として比較的大型建物に分別可能である。また出土遺物もまとまっており、須恵器杯をはじめ、有台杯、盤、蓋・甕がある。無台杯は流れ込みと思われる第15図5の1点を除き、8世紀第2四半期から第3四半期に比定される。また瓦は押印が3ヶ所確認された平瓦と丸瓦が出土している。その他軟質砂岩製の砥石、鐵滓が出土している。

8世紀後葉 掘立柱建物跡SB01、竪穴建物跡SI02および井戸SE01が相当する。やはり一部が保存区域に括がっており完掘されたものではないが、SB01は桁行4間、梁行2間以上の南北棟である。須恵器蓋の出土がある。また竪穴建物跡SB02は先のSB01よりも大きく一辺6.0mを測り、当該期として大型建物に分別できる。遺物としても須恵器杯のほか、小破片であるが円面鏡の出土は特筆される。井戸SE01からは須恵器無台杯、甕。土師器甕が出土している。これら須恵器はいずれも8世紀第3四半期から第4四半期に比定される。

9世紀前葉から中葉 掘立柱建物跡SB02・03および井戸SE02が相当する。全体的に遺物量が限定され、時期について明確さに欠ける部分が多い。なかでもSB02は須恵器無台杯、盤が出土し、9世紀中葉に比定されているが、柱掘形が2基のみで全容を把握できていない。ただし、SB03の出土遺物である須恵器有台杯は9世紀前半に比定さ

れるものの、SB01と主軸方位がほぼ一致し、柱筋が並んでいることから、機能が共通する建物として指摘することができる。またこれらに関連して南北に並ぶ柱穴列がある。柱掘形にはらつきがみられるが、建物群の東面に設置された場と考えられる。

10世紀 壁穴建物SI05が相当する。SI05はSI04およびSI06の2軒の壁穴建物を切って構築していく重複建物である。検出はグリッド調査のため、SI04や06を含めその前後については全容を把握できない。しかし、本遺跡ではこれ以後の平安時代に比定される遺構・遺物が確認されていないことから、この段階をもって当集落の終焉を迎える。

(2) 中世以降

中世 ここでは古代末から中世にかけての転換期は空白期間といえる。しかし、12世紀以降となると、井戸・壁穴状遺構・土坑・溝・柱穴群など明確な遺物の出土は少ないが、明らかに鎌倉時代以降の中世に比定される遺構群が確認されている。溝SD01は鉤型に屈曲している区画溝であり、屋敷溝と考えられる。この溝内に壁穴状遺構等が存在する。

(大潤・小川)

4-2 SI01・SX01出土の文字瓦について

壁穴建物SI01および大型壁穴状遺構SX01から3点の文字瓦が出土した。これらの文字瓦はいずれも凸面に糸切り痕を残す点で共通しており、台渡里廃寺跡長者山地区(那賀郡衙正倉院)の瓦倉SB001から出土しているものと技術的特徴が一致する。本地区と台渡里廃寺跡長者山地区は直線距離で僅か500m程度しか離れていないことから、これらの瓦は台渡里廃寺跡長者山地区的瓦倉の屋根に葺かれていたものが二次的に当遺跡に持ち込まれ、最終的に個々の遺構内に投棄された可能性が高い。本節ではその特徴を再確認するとともに、文字瓦が提起するいくつかの問題を取り上げる。

(1) 台渡里廃寺跡長者山地区の瓦倉の下限年代

台渡里廃寺跡長者山地区的瓦倉について森修夫氏は、郷里銘の記されたヘラ書き文字瓦が出土していることから、郷里銘の廃止された天平12年(740)よりも前に造営されたと理解されている(森 1973・1986・2001)。しかしながら、考古学的な出土状況から瓦倉の造営年代を知る手がかりは殆ど得られてないのが現状である。

前節で明らかとなったように、8世紀第3四半期に集落が廃絶した後、柵列あるいは掘立柱塀に囲まれた掘立柱建物群が展開する。8世紀第3四半期の集落廃絶に伴い、台渡里廃寺跡長者山地区的瓦倉の屋根に葺かれていたとみられる瓦が壁穴建物や円形有段遺構に投棄されていた状況は、瓦の下限年代を示すものとして重要な情報である。

SI01やSX01から出土している須恵器の年代は、8世紀第2四半期から第3四半期に位置づけられることから、瓦の年代は8世紀第3四半期以前に遡る可能性が高い。

(2) 総瓦葺建物の存在を示すヘラ書き文字瓦

次にSX01から出土したヘラ書き文字瓦についてみてみよう。SX01から出土した文字瓦はヘラ書きにより、「口色」と記銘されている隅切平瓦である。隅切瓦が出土する建物の屋根景観は総瓦葺であったことになるため(大橋 2004)、これらの瓦の供給源であった台渡里廃寺跡長者山地区には、総瓦葺建物が存在した可能性が高いことになる。平成18年度から水戸市教育委員会が行っている台渡里廃寺跡長者山地区的範囲確認調査では、SB001とSB002が出土瓦の量から総瓦葺の瓦倉と考えられている(川口 2007・2008a・2008b・2008c、川口・新垣・渥美・木本 2008)。

先にも指摘したように、このヘラ書き文字瓦は長者山地区的SB001から出土している瓦と製作技術の特徴が一致

一重 圓線								
二重 圓線						圓線なし		

1~4・8~10・12~14:台渡里廃寺跡長者山地区SB001 5:台渡里廃寺跡長者山地区SB004 6:堀遺跡第9地点SX01
7:台渡里廃寺跡長者山地区採集 11:北屋敷遺跡 15:田谷廃寺跡採集

第35図 那賀郡内出土の押印文字瓦

しており、SB001からは高井悌三郎氏の調査で、「生部色万」や「部色万」とヘラ書きされた有段式丸瓦や「色万」とヘラ書きされた凸面に糸切り痕を有する平瓦などが出土していることから(高井 1964、川口 2006)、SB001に葺かれていたものとみて良さそうであるが、特定の時期に生産された瓦は全て同時期に建造されつつあった所用建物の屋根にのみ使用された訳ではなく、先行して造営されていた瓦葺建物の屋根に補修瓦として流用されることは多々あった。従って、このヘラ書き文字瓦がSB001に葺かれていたと断定することはできないものの、SB001が総瓦葺であったことを想起させる興味深い資料と言うことができる。

(3)異なる2種の印が押された文字瓦

次にSI01から出土した押印文字瓦に着目してみたい。SI01から出土した文字瓦には押印「稲」と「通」に似た糸読不明の押印文字が同一個体に押印された平瓦1点がある。

第35図は、これまで常陸国那賀郡内で知られている押印文字瓦を集めたものである。現状では15種類の押印文字が確認されているが、良好な一括資料とみられる高井悌三郎氏の調査で出土したSB001出土の押印文字瓦を見ると、「川部」や「稲」、「大井」の押印が複数箇所に押されている例はあるものの、異なる印が同一個体の瓦に押されている例は確認されていない。従って、「稲」と「通」の押印文字が同一個体に押印された平瓦は、これまでに出土例のない資料ということになる。

これまでに知られている印は「稲」(阿波郷)、「川部」(川辺郷)、「大井」(大井郷)、「八部」(八部郷)、「下日下」(下部郷)、「水」(清水郷カ)、「木」(木倉郷カ)ですべて郷名と考えられる資料である。高井悌三郎氏の調査資料を良くみると、「稲」の押印は「阿波郷大田里」というヘラ書きを持つ瓦に押印されており、「川部」は「川部」というヘラ書きや「小河里戸主」というヘラ書きを持つ瓦に押印されている(高井 1964、川口 2006)。

瓦に印を押す背景については、森 郁夫氏が次のように指摘されている。「略・・・「へら書き」の人名と刻印の郷名の両者が瓦面にあらわれているものもあり、明らかに瓦生産の一つの方式をあらわすものである。台渡廃寺跡、すなわち前にふれた徳輪寺の造営にあたって、瓦生産を一定の郷に負担させるべく割り当て、検収のための刻印を作つておく。この印章はすべての瓦に押捺するのではなく、何十枚かに一枚押捺するのであろう。そして割り当てられた各郷の戸主の名を「へら書き」する。それぞれ経費を負担した本人が書き記すのではなく、工房に駐在している監督者が書き記すのであろう」(森 2001: 211頁)。

これらの押印文字瓦のヘラ書きで記された郷名と印章の郷名が対応することから、森氏の指摘のとおり数量把握の

のような目的で押印されたものと考えるのが自然であろう。

ただし、第35図5のように一重の圈線内に「瓦」と記銘された押印文字も出土しており、これは常陸大宮市三美前山遺跡の出土資料(瓦吹 2005)と同じものである。現時点では「瓦」の文字を含む郷名は知られていないことから、全ての押印文字が那賀郡内の地名でなかった場合も想定されよう。「通」に似た押印文字の篆文はともかく、これが「郷名」!であるとすれば、経費負担の在り方を示唆する興味深い資料と言えるのではないだろうか。

山路直充氏によると、武藏国分寺では異なる郡名をひとつの文字瓦に記している例があるようなので(山路 2005)、そうしたものと同じである可能性も考えられる。ただし、出土例が少ないことを考慮すると誤って押印してしまったまま、焼成してしまった可能性も考えられる。本報告では、両者の可能性を指摘するにとどめ、今後の類例の増加に期待したい。

(木本・川口)

註

- 1) 「通」の文字が郷里銘であることを証明するには、「通口郷」と記銘された墨書き器が出土するか、「通口郷」や「通口里」と記銘され、なおかつ「通」の押印が施されている文字瓦が出土すれば証明できる可能性がある。

引用・参考文献

- 井 博幸 1999 「第9章 考察10 内原町を中心とした古墳の編年(試案)」『牛伏4号墳の調査』国士館大学・牛伏4号墳調査団
- 井 博幸・小宮山達雄 1999 「第7章 内原町周辺的主要古墳と出土遺物」『牛伏4号墳の調査』国士館大学・牛伏4号墳調査団
- 伊東重敏 1975 『常陸考古学研究所学報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究(その2) 水戸市田谷廬跡出土古瓦雜考』常陸考古学研究所
- 伊藤康倫 1995 『茨城県水戸市 堀遺跡一住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 井上義安編 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 井上義安・栗原芳子 1996 『水戸市台渡里遺跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房
- 井上義安・蓼沼香未由・仁平妙子・根本睦子 1998 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市台渡里廬跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廬跡発掘調査会
- 井上義安・千葉隆司・樺村宜之 1995 『水戸市堀遺跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市堀遺跡発掘調査会
- 茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図』
- 大森信英 1952a 「渡里村大字堀字西原四号地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第1号 茨城高等学校史学部
- 1952b 「渡里村大字堀字西原の地下式墳」『茨城高等学校史学部紀要』第1号 茨城高等学校史学部
- 1964 「古墳文化と那珂国造」『水戸市史 上巻』水戸市史編纂委員会
- 1974a 「69 権現山下横穴群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県
- 1974b 「富土山古墳群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県
- 小川和博・大瀬淳志・川口武彦・松谷暁子 2006 『台渡里遺跡 一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 樺村宜之 1993 『(仮称)水戸淨水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡』財團法人茨城県教育財団
- 2005 「堀遺跡」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺における集落の様相—常陸国河内郡を中心として—』茨城県考古学協会
- 川口武彦 2005 『常陸国那賀郡における郡衙と周辺寺院—国指定史跡「台渡里廬跡」範囲確認調査成果を中心に—』『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 2006 「台渡里廬跡の文字瓦—辰馬考古資料館所蔵資料調査中間報告(2)—』『明治大学古代学研究所紀要』第3号 明治大学古代学研究所
- 2007 「水戸市台渡里廬跡一律令国家の權威を象徴する寺院と瓦葺きの正倉—』『埋蔵文化財センター 第21回企画展 2006発掘と発見 茨城県内遺跡の発掘速報展』取手市埋蔵文化財センター
- 2008a 「瓦倉の瓦に記録された名前は誰か—水戸市台渡里廬跡長者山地区出土人名文字瓦の分析から—』筑波大学先史学・考古学研究会第19号 筑波大学歴史・人類学系
- 2008b 「茨城県水戸市台渡里廬跡長者山地区・大串遺跡第7地点」『古代交通研究会第14回大会資料集 アヅマの国の道路と景観』古代交通研究会
- 2008c 「■問題提起18■ 常陸国那賀郡衙周辺における瓦倉の造営—対蝦夷政策に伴う兵站基地の莊嚴化—』『地方史研究』第334号 地方史研究会
- 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 2005 『台渡里廬跡一範囲確認調査報告書』水戸市教育委員会
- 川口武彦・新垣清貴・溝澤賢吾・木本崇周 2008 『(P17)常陸国那賀郡衙正倉院の瓦倉—茨城県水戸市台渡里廬跡長者山地区の確認調査—』『有限責任中間法人日本考古学協会第74回総会 研究発表要旨』有限間に中間法人日本考古学協会
- 川崎純徳 1982 『茨城の裝飾古墳』新風土記社
- 瓦吹 堅 1991 『水戸市台渡里廬跡覚書三—觀音堂山・南方・長者山地区的性格について—』『婆良岐考古』第13号 婆良岐考古同人会

- 2005 「大宮町三美前山の瓦」『古代東国考古学一大金宜亮氏追悼論文集一』慶友社
- 黒澤彰哉 1994 「学術調査報告書IV 茨城県における古代瓦の研究」茨城県立歴史館
- 1998 「常陸国那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立歴史館報』第25号 茨城県立歴史館
- 2000 「台渡庵寺と那賀郡衙」『文字瓦と考古学』国士館大学実行委員会
- 高井悌三郎 1964 「常陸台渡庵寺跡・下総結城八幡瓦窯跡」茨城県教育委員会
- 外山泰久 1993 「アラヤ前遺構（水戸市渡里町）をめぐって」『常總の歴史』13 善書房
- 中山 晋 1996 「古代日本の『水室』の実体—栃木県下の例を中心として—」『立正史学』第79号 立正史学会
- 1999 「古代日本の水室の研究」『食文化助成研究の報告』9 財団法人味の素食文化センター
- 2001a 「水室研究の現状と課題」『研究紀要』第9号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 2001b 「第5章 まとめ 第2節 大関台遺跡発見の円形有段遺構＝水室について」『大関台遺跡——一般国道121号瑞穂野バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団
- 生田目和利・福田健一 2002 「茨城県」『第51回 埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～資料集』 埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部・福岡県教育委員会
- 藤村達巳・塙谷 修 1982 「第2章 調査報告(1) 古墳群の立地と環境」『常陸安戸星古墳』水戸市教育委員会
- 茂木雅博編 1982 「常陸安戸星古墳」水戸市教育委員会
- 森 郁夫 1973 「奈良時代の文字瓦」『日本史研究』487 日本史研究会
- 1986 「IV.瓦の生産 3. 文字瓦」『考古学ライブラリー43 瓦』ニュー・サイエンス社
- 2001 「第三章 文字や絵のある瓦」『ものと人間の文化史100 瓦』法政大学出版局
- 山路直充 2005 「文字瓦の生産一七・八世紀の坂東諸国と陸奥国を中心にー」『文字と古代社会 三 流通と文字』吉川弘文館
- 渡辺俊夫 1981 「第5章 砂川遺跡」『(茨城県教育財団文化財調査報告第XVI) 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人茨城県教育財団

第8表 堀跡第9地点出土土器観察表

擇回 番号	造模	器種	重量(cm)(復元値) G保 器高 底径	整形・調整		胎土	色調	焼成	備考	
				天井回転ヘラ削り	底部手持ちヘラ削り					
第6回 1	S801	須恵器 罐	18.6 (2.3)	-	天井回転ヘラ削り	黒色粒子・石英・長石	灰色	良好		
第6回 1	S802	須恵器 罐	11.4 (4.2)	5.2	底部手持ちヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	ヘラ記号	
第6回 2	S802	須恵器 罐	-	(3.7)	6.0	底部手持ちヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	ヘラ記号
第6回 3	S802	須恵器 罐	-	20.2 (3.1)	-	底部手持ちヘラ削り	黑色粒子・石英・長石	灰色	良好	
第10回 1	S803	須恵器 有台杯	-	(3.0)	-	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	
第15回 1	S901	須恵器 罐	12.6 (4.7)	8.0	底部回転ヘラ削り	石英・長石	灰黄色	良好	ヘラ記号	
第15回 2	S901	須恵器 罐	13.0 (4.3)	8.0	底部回転ヘラ削り	石英・長石	灰白色	良好	ヘラ記号	
第15回 3	S901	須恵器 罐	13.4 (4.7)	7.8	天井下端回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好	ヘラ記号	
第15回 4	S901	須恵器 罐	13.0 (4.0)	9.0	底部手持ちヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好		
第15回 5	S901	須恵器 罐	-	(3.5)	6.2	底部手持ちヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	
第15回 6	S901	須恵器 罐	-	(2.5)	7.8	底部手持ちヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	ヘラ記号
第15回 7	S901	須恵器 矩瓶	13.8 (3.6)	6.0	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	ヘラ記号	
第15回 8	S901	須恵器 矩瓶	-	(2.9)	15.6	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	
第15回 9	S901	須恵器 罐	-	4.0	18.6	天井回転ヘラ削り	黑色粒子・石英・長石	灰白色	良好	
第15回 10	S901	須恵器 便	-	-	-	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好		
第15回 11	S901	須恵器 便	-	(3.4)	14.0	底部回転ヘラ削り/後手持ちヘラ削り 黑色粒子・石英・長石	黑色粒子・石英・長石	灰色	良好	
第19回 1	S602	土師器 罐	-	(1.0)	7.0	外側ヘラ削り・内面ナナ子	石英・長石	浅黃褐色	良好	木葉痕
第19回 2	S602	土師器 罐	-	(1.0)	10.0	内面ナナ子	石英・長石	褐色	良好	木葉痕
第19回 3	S602	土師器 罐	-	13.0 (4.5)	7.8	底部回転ヘラ削り	黑色粒子・石英・長石	灰色	良好	
第19回 4	S602	土師器 円盤甌	-	-	-	クロロコテ 植物油波文状	黑色粒子・石英・長石	灰色	良好	
第19回 5	S602	土師器 罐	-	-	-	植物油波文状	石英・長石	灰色	良好	
第20回 1	S603	土師器 罐	-	21.0 (9.0)	-	横ナタヘ、ヘラナナ子	石英・長石	にふい黄褐色	良好	
第20回 2	S603	土師器 平底	-	7.6 (7.6)	-	クロロコテ	黑色粒子・石英・長石	灰色	良好	灰褐色
第21回 1	S605	土師器 瓶	-	15.0 (6.7)	7.2	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	ヘラ記号
第22回 1	S607	土師器 盆	-	(1.6)	(8.0)	需ナナ子	黑色粒子・石英・長石	灰色	良好	
第24回 1	SX001	長颈瓶	-	-	-	黑色粒子・石英・長石	深灰色	良好		
第24回 2	SX001	須恵器 長颈瓶	-	-	-	黑色粒子・石英・長石	深褐色	良好		
第24回 3	SX001	須恵器 石用燒口	-	-	-	黑色粒子・石英・長石	深褐色	良好		
第24回 4	SX001	須恵器 瓶	-	4.80 (12.7)	-	クロロコテ	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	灰褐色
第27回 1	SE01	土師器 瓶	-	27.0 (8.6)	-	横ナタヘ、ヘラナナ子	黑色粒子・石英・長石	明褐色	良好	
第27回 2	SE01	土師器 瓶	-	(3.2)	4.0	外側ヘラ削り、内面ナナ子	海綿骨針・石英・長石	褐色	良好	赤彩
第27回 3	SE01	須恵器 瓶	11.0 (4.0)	11.0	底部回転ヘラ削り、手持ちヘラ削り	黑色粒子・石英・長石	深灰色	良好		
第27回 4	SE01	須恵器 瓶	13.4 (4.0)	8.0	底部手持ちヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好		
第27回 5	SE01	須恵器 瓶	-	(3.5)	8.6	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	
第27回 6	SE01	須恵器 瓶	-	-	-	植物油波文状	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	
第27回 7	SE01	須恵器 瓶	-	5.00 (17.0)	-	外側ヘラタキタ	石英・長石	灰色	良好	
第28回 1	SE02	須恵器 瓶	-	(3.1)	8.0	底部手持ちヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰白色	良好	
第28回 2	SE02	須恵器 瓶	-	(1.3)	7.0	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰色	良好	ヘラ記号
第28回 3	SE02	須恵器 瓶	-	(2.5)	-	天井回転ヘラ削り	石英・長石	深褐色	良好	内面ヘラ記号
第28回 5	SE03	常滑 豆	-	(4.6)	-	内面ヘラ削り	黑色粒子・石英・長石	灰白色	良好	内面轉刻
第29回 1	SK10	須恵器 壺	-	(3.9)	15.0	クロロナナ子	黑色粒子・石英・長石	灰白色	良好	
第30回 1	SK12	須恵器 有台杯	-	(3.4)	10.1	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	深灰褐色	良好	
第34回 1	美保	須恵器 有台杯	-	(4.1)	9.0	底部回転ヘラ削り	海綿骨針・石英・長石	灰褐色	良好	

第9表 墓道第9地点瓦觀察表

第9表 磁道跡第9地點瓦鐵察表

写 真 図 版



調査区全景



調査区全景



調査区全景



遺跡遠景



1 1号掘立柱建物跡(SB01)全景

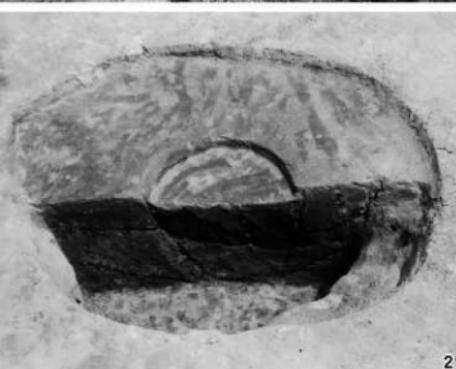
2 1号掘立柱建物跡(SB01) P2
3 1号掘立柱建物跡(SB01) P44 2号掘立柱建物跡(SB02) P2
5 2号掘立柱建物跡(SB02) 全景

4

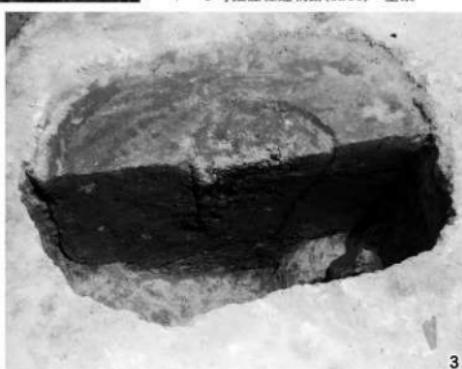
5



1 3号掘立柱建物跡(SB03) 全景



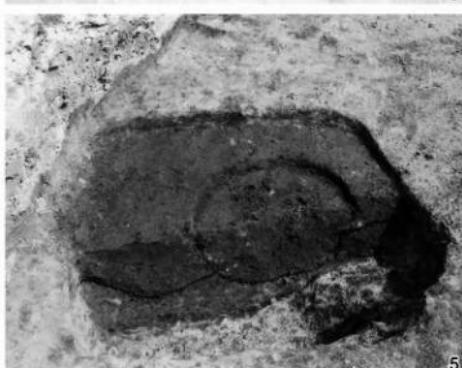
2



3



4



5

2 3号掘立柱建物跡(SB03) P3 3 3号掘立柱建物跡(SB03) P5
4 3号掘立柱建物跡(SB03) P6 5 3号掘立柱建物跡(SB03) P7



1号竪穴建物跡(SI01)



1号竪穴建物跡(SI01) カマド



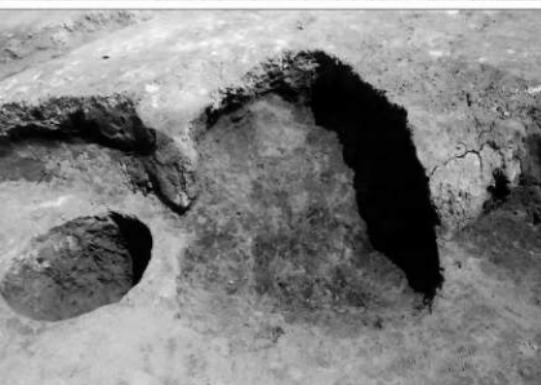
1号竪穴建物跡(SI01) 遺物出土状況



1号竪穴建物跡(SI01) 遺物出土状況



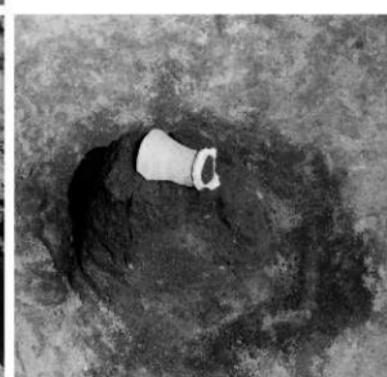
2号竪穴建物跡(SI02)



2号竪穴建物跡(SI02) カマド



3号竪穴建物跡(SI03)



3号竪穴建物跡(SI03) 遺物出土状況



4号・5号・6号竪穴建物跡
(SI04・05・06)



7号竪穴建物跡(SI07)



1号円形有段造構(SX01)



1号井戸(SE01)



1号井戸(SE01)



2号・3号井戸(SE02・03)



1号溝(SD01)



1号溝(SD01)



2号溝(SD02)



第1柱穴群(Pit01)



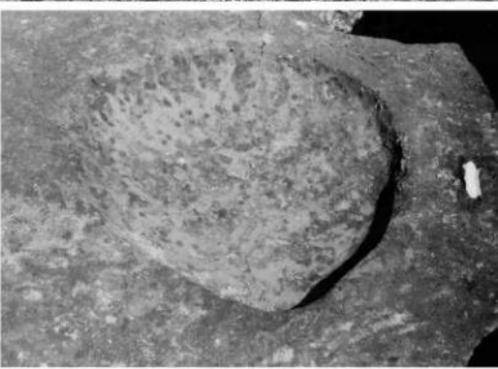
第2柱穴群(Pit02)



第2柱穴群(Pit02)



4号土坑(SK04)



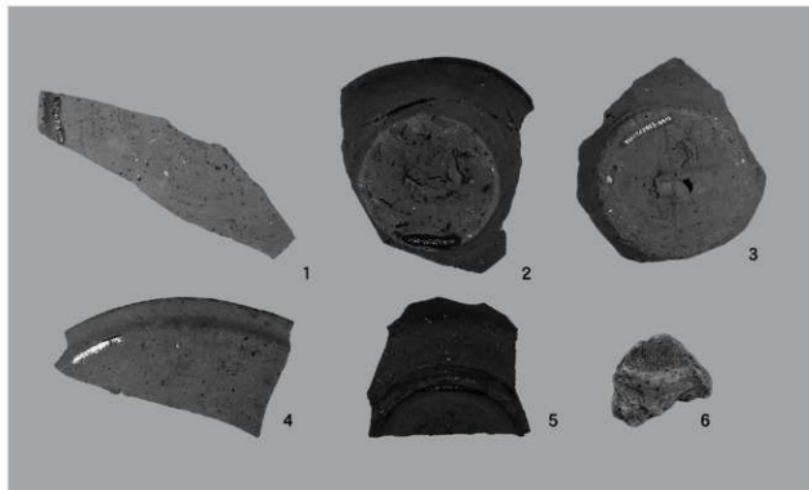
6号土坑(SK06)



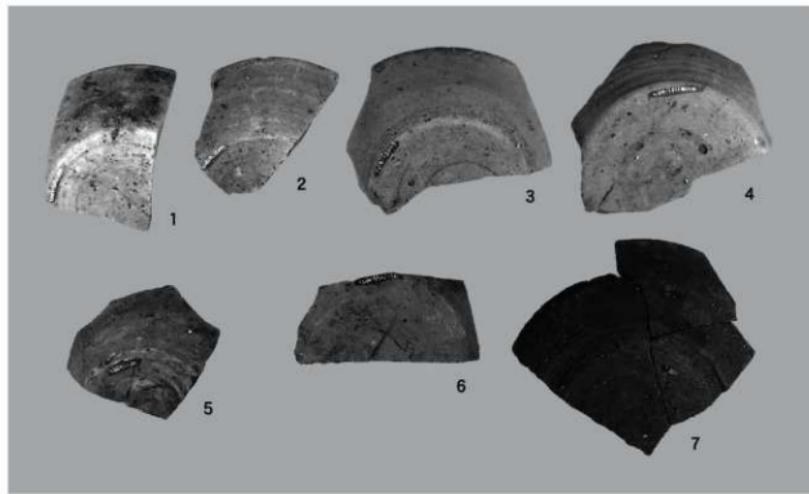
7号土坑(SK07)



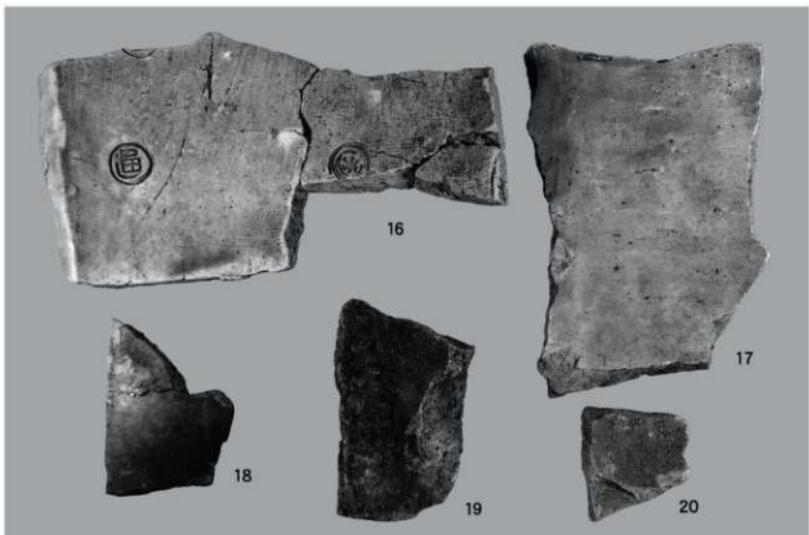
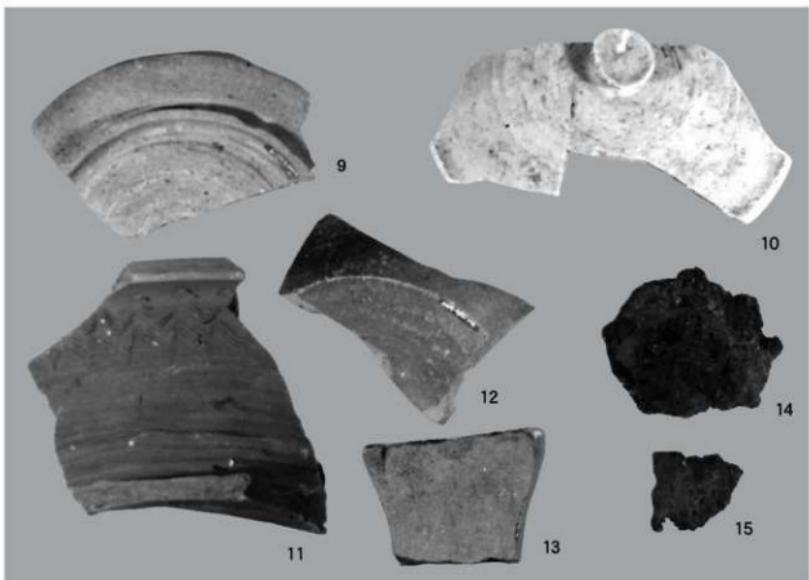
8号·14号土坑(SK08·14)



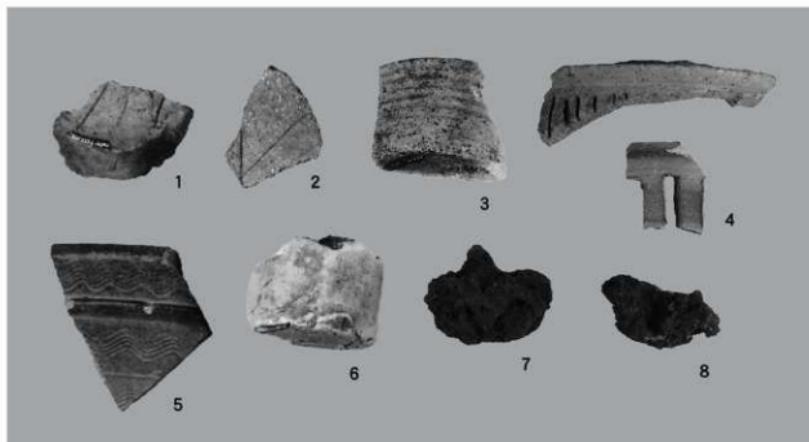
1 : SB01 2~4 : SB02 5 : SB03 6 : SA01



1~7 : SI01



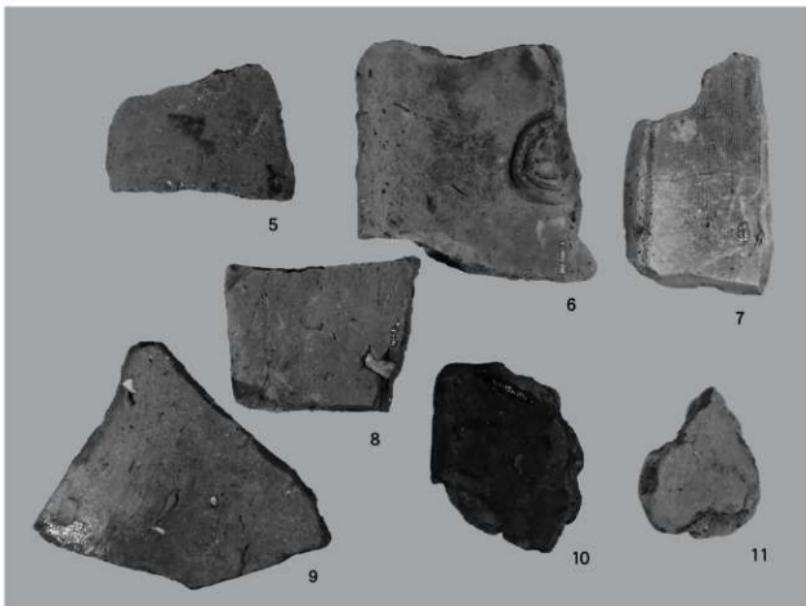
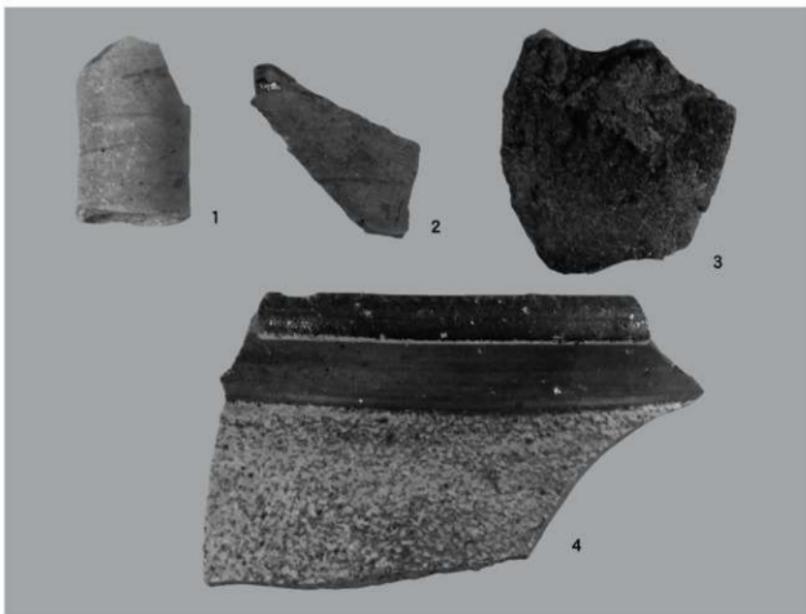
9~20 : SI01



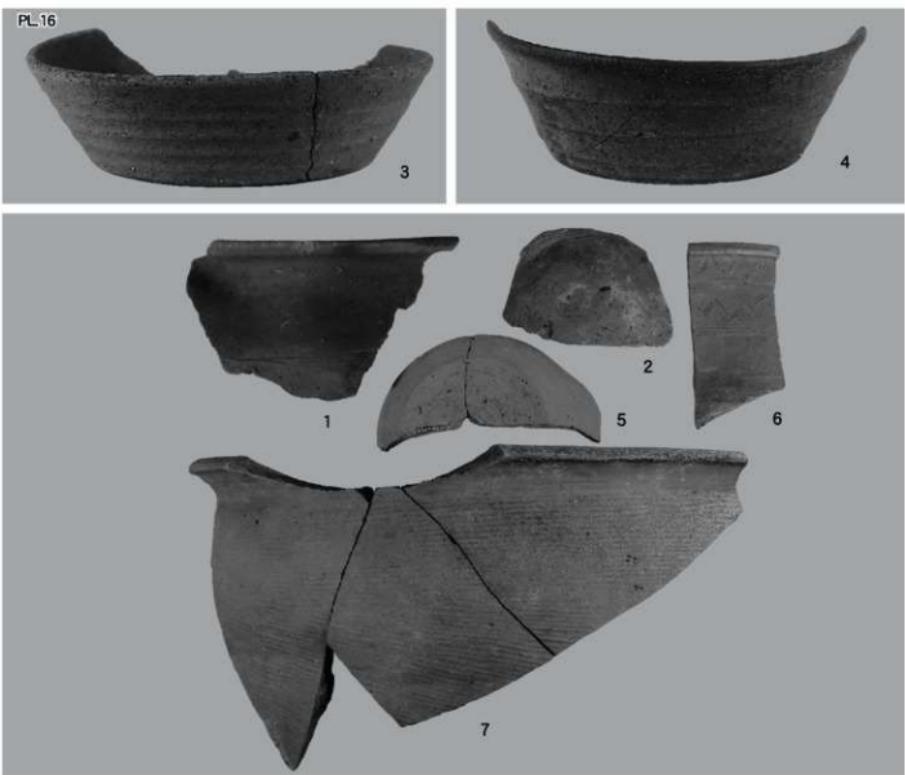
1~8 : SI02



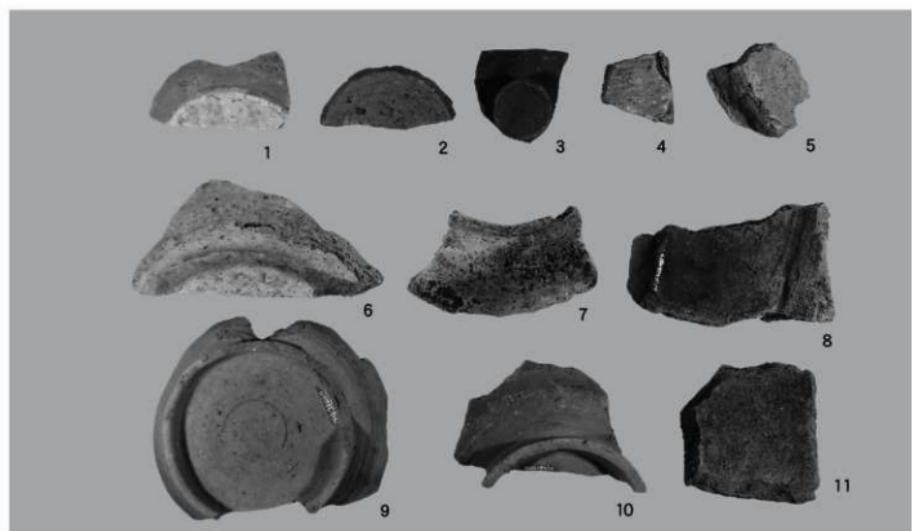
1・2 : SI03 3 : SI05 4 : SI07



1~11 : SX01



1~7 : SE01



1~5 : SE02 6 : SE03 7 ~ 8 : SK10 9 : SK12 10 ~ 11 : 表採

報告書抄録

ふりがな	ほりいせき(だいきゅうちん)							
書名	堀遺跡(第9地点)							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第19集							
編集者名	小川和博・大沢淳志							
著者名	小川和博・大沢淳志・渥美賀吾・川口武彦・木本掌周・遠藤啓子							
編集機関	有限会社 日考研茨城	所在地	〒300-0508 茨城県稟敷市佐倉3321-1	☎029-892-1112				
発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1	☎029-224-1111(代)				
発行年月日	2008(平成20)年9月26日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
堀遺跡 (第9地点)	水戸市鹿町字高野台 3309, 3314, 3315, 3316-1, 3316-3, 3317-1番地	08201	064	36° 24' 31"	140° 25' 32"	2007.7.23 ~ 2007.9.8	1,048m ²	宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
堀遺跡 (第9地点)	集落跡	奈良・平安	竪穴建物、掘立柱建物 跡、礎列、円形有段遺 構、土坑、井戸跡	土師器、須恵器、 瓦、砥石、鐵滓		7世紀後葉から10世紀の集落が 検出された。8世紀中葉に位置 付けられるS101の覆土からは、 「通」と「禾」という2種の異 なる印が押された文字瓦が出土 した。		
		中世以降	竪穴状遺構、柱穴群、 溝跡					

※北緯・東経は測地系2000対応。Web版TKY2JD(Ver.1.3.79)による変換。

水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里廃寺跡 一範囲確認調査報告書一	2005年3月発行
第2集	台渡里廃寺跡 一市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)一	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡 一グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2005年8月発行
第4集	台渡里廃寺跡 一市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)一	2006年3月発行
第5集	台渡里遺跡 一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2006年3月発行
第6集	吉田古墳I 一史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次調査報告書一	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡(第3地点) 一市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2006年3月発行
第8集	坏遺跡(第3地点) 一ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第9集	坏遺跡(第4地点) 一ブランクニコリースII建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第10集	吉田古墳II 一史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書一	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007年3月発行
第12集	アラヤ遺跡(第2地点) 一市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第13集	米沢町遺跡(第5地点) 一住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2007年3月発行
第14集	大串遺跡(第7地点) 一介護老人福祉施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年3月発行
第15集	台渡里遺跡(第39次) 一公共下水道管理設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年3月発行
第16集	渡里町遺跡(第5地点) 一市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年6月発行
第17集	渡里町遺跡(第6地点) 一市道常磐34,275号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年6月発行
第18集	薄内遺跡(第1地点) 一移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年8月発行
第19集	堀遺跡(第9地点) 一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	2008年9月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告第19集

堀 遺 跡(第9地点)

一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

印刷 平成20年9月26日
発行 平成20年9月26日

編集 有限会社 日考研茨城
発行 水戸市教育委員会
印刷 有限会社 田辺印刷